

令和5年度  
常葉大学 学生自主企画  
とこは未来塾 -TU can Project-  
活動報告書



## 目 次

ここは未来塾 -TU can Project- 概要	3
----------------------------	---

### ベーシックプラン 13 団体による報告 [報告書・ポスター]

◎採択団体一覧	4
1. にしなサマーキッズカレッジ	6
2. しずおか「親子で行ける自然体験の場」の提案	10
3. SDGs で富士市・富士宮市を元気にしたい!	14
4. 三保半島のプラごみ調査 ～アクセサリ体験会を添えて～	18
5. 「私たちのハッシュタグ#」常葉企画開発部!	22
6. サイエンスカフェ常葉	26
7. “ゼロ” から始める静岡人生設計 ～by Life Plan Game～	30
8. 弁当開発食育講座プロジェクト～子どもたち、そして地域の未来へ～	34
9. うなぎいもスイーツの開発プロジェクト	38
10. まるごとあそぶ・まなぶ防災プロジェクト	42
11. 足を速くする秘密を大公開スペシャル	46
12. 地域連携×スポーツで地域活性プロジェクト	50
13. 小学校体育支援ボランティア	54

### ライトプラン 4 団体による報告 [ポスター]

◎採択団体一覧	58
1. 高天神城跡マイクラ化プロジェクト	60
2. チャレンジ バレーボール	61
3. ボッチャを通した生涯スポーツによる地域活性化	62
4. 果物廃棄の発生を抑制する試み	63



# 『令和5年度 ところは未来塾 -TU can Project-』

「ところは未来塾 -TU can Project-」は、本学の専門性及び地域の特性を活かして、地域社会・地域産業の様々な課題に学生が自主的・主体的に取り組むことを支援するものです。

## 1. 目的

学生ならではのユニークな「視点と発想」をもち、「熱意と創意」に満ちた自主的・自発的な取組に対し、大学から教員アドバイザーによる助言や活動資金の援助などの様々な支援を行う。大学が立地する静岡県を中心とした地域社会への貢献を果たすとともに、学生の若い力を地域の活性化に結び付ける。

## 2. 募集プラン

### (1) ところは未来塾 ベーシック

本事業の目的に即し、具体的かつ発展性のあるプロジェクトに対応するプラン

### (2) ところは未来塾 ライト

本事業に挑戦しやすく、事業負担の少ないスタートアッププラン

## 3. 募集分野

### (1) タイプA：開かれた大学づくりプロジェクト

キャンパス内で様々な地域交流活動を企画し、本学が標榜する「開かれた大学づくり」への貢献を目指す取り組み。

### (2) タイプB：地域貢献・活性化プロジェクト

県内各地の地域課題の解決や地域活性化への貢献を目指す取り組み。

### (3) タイプC：現代的課題解決プロジェクト

各種の研究開発や調査研究などを通して、社会的・公共的な課題解決への貢献を目指す取り組み。

## 4. 審査基準

- (1) 学生が問題意識を持ち、主体的に設定した明確な目的があること。
- (2) 本学の教育理念・3ポリシーとの関連で、意義が認められる。
- (3) 学内ないし地域の活性化もしくは課題解決が期待できる。
- (4) 明確な実行計画が示されており、着実な推進が期待できる。
- (5) 具体的かつ妥当な予算が計上され、執行計画が示されている。
- (6) 期待できる効果が具体的に示されている。

## 5. 助成金額

- (1) ベーシックプラン：1プロジェクトあたり15万円を上限とする。
- (2) ライトプラン：1プロジェクトあたり5万円を上限とする。

## 令和5年度ここは未来塾 ベーシックプラン 採択団体一覧

ベーシックプラン：本事業の目的に即し、具体的かつ発展性のあるプロジェクトです。

NO	キャンパス	タイプ	テーマ	グループ名
1	静岡 草薙	B	にしなサマーキッズカレッジ	リンク西奈 2023
2	静岡 草薙	B	しずおか「親子で行ける自然体験の場」の提案	小杉山ゼミ
3	静岡 草薙	B	SDGsで富士市・富士宮市を元気にしたい！	三井・池田ゼミ
4	静岡 草薙	C	三保半島のプラごみ調査 ～アクセサリ体験会を添えて～	山田建太ゼミ
5	静岡 草薙	C	「私たちのハッシュタグ#」常葉企画開発部！	赤塚・山屋ゼミ
6	静岡 瀬名	B	サイエンスカフェ常葉	村井ゼミ
7	浜松	B	“ゼロ”から始める静岡人生設計 ～by Life Plan Game～	静岡活性隊
8	浜松	B	弁当開発食育講座プロジェクト ～子どもたち、そして地域の未来へ～	長芳ノ神
9	浜松	B	うなぎいもスイーツの開発プロジェクト	TOKOFARM
10	浜松	C	まるごとあそぶ・まなぶ防災プロジェクト	ThunderBirds
11	浜松	B	足を速くする秘密を大公開スペシャル	RED
12	浜松	B	地域連携×スポーツで地域活性プロジェクト	ふれぐるラボ
13	浜松	B	小学校体育支援ボランティア	SMILE SUPPORTER

タイプA：開かれた大学づくりプロジェクト

タイプB：地域貢献・活性化プロジェクト

タイプC：現代的課題解決プロジェクト

**ベーシックプラン**

**13 団体による報告**

**報告書・ポスター発表**

## にしなサマーキッズカレッジ

所属：リンク西奈 2023

教育学部 鈴木ひかる（代表）、高塚桃香、岡田小那実、小長谷泰雅、鈴木暖、西村幸恵、別府込和奏、鈴木雄大、中西貴太、堀内優太、深澤美優、牧野成美、松下菜月、森愛那、木下竜志、久保田樹里、小林陽亮、津島鳳希、中野湧水、村松華実、鈴木里安

### 1. 目的・概要

昨年度は、西奈生涯学習センターとの共催事業「ゲームで学ぼう in 夏休み」を開催した。昨年度の活動を踏まえて、“学生対児童”だけでなく、“児童対児童”の対話を実現させたいという反省が得られ、昨年度は「児童同士の対話」をテーマに活動を行った。実施にあたって、児童たちが話す状況が生まれる教材選びや場面設定をしたことで、児童同士で話している様子が見受けられた。一方で、話している様子は見られたものの、それがほんものの“対話”であるのか、又、実際にどのような対話が行われているのかということについての観察及び考察はなされていなかった。

そこで、本年度は、①具体的な対話の内容に着目し、どのような対話活動が広げられているのかを観察・分析すること、②個別最適な学びを実施するための手立ての模索することを目的し、「児童間の協働的な学び」をテーマに設定し、活動を行った。これらは現行学習指導要領にある「主体的・対話的で深い学び」「協働的な学び」「個別最適な学び」を意識したものであり、参加する児童にとっての自己の学習観、学生にとっての指導観の変容を目指したものである。学生においては、教員を目指す人としてこれらの“今求められている教育の在り方”について、活動を通して、具体的に理解すること、学生同士で協議しながら考えを深めていくことを期待し、活動を行った。

### 2. 事業内容・方法

#### (1) 事業計画

本事業では、夏期4回、冬期2回の計6回、小学2～5年生を対象に、西奈生涯学習センターにて講座を企画した。夏期は「にしなサマーキッズカレッジ」と題し、コマを教材に“長くまわるコマを作ろう”という活動を行った。冬期は「にしなクリスマスキッズパーティー」と題し、“見習いサンタになって身近な人に想いを伝えよう”という活動を行った。



<夏期講座第4回 活動写真>



(2) 日時・内容

○夏期「にしなサマーキッズカレッジ」

第1回 8月5日(土) 10:30-11:30【コマをまわそう】

第1回では、アイスブレイクを始めとした、児童交流を意識した活動を設定した。「新聞配達ゲーム」では、より早く新聞を配達できるようにチームメイトと話し合い、活動を通して緊張をほぐすことができた。実際にコマを作ってもらった活動では、児童同士交流しながらコマの基礎となる部分を製作した。製作に苦戦している児童を他の児童が助ける場面もあり、より協働的な学びになっていたのと同時に、多くの児童がコマ作成に興味を持ち、楽しい雰囲気で行うことができた。

第2回 8月12日(土) 10:30-11:30【長くまわるコマをつくろう】

第2回は、長く回るコマを目指して、第1回で製作した基本のコマを基に、材料を変えてコマ作りを行った。3,4人のグループで活動し、協力して課題に取り組む中で、徐々に児童同士が打ち解けていき、会話が増えていく様子がみられた。講座の後半には、中間発表会を行い、他のグループのコマの様子や工夫点を知り、第3回での製作に活かすことができるようにした。

第3回 8月19日(土) 10:30-11:30【もっと長くまわるコマをつくろう】

2回目に引き続き、グループごとに材料を工夫してコマの製作を進めた。3回目では、より協働的な活動を取り入れるため、活動の中間にジグソー活動を実施した。自分のグループで作っているコマと材料、工夫している点について、他のグループの人たちに情報を共有し、それを自分のグループで共有した。「もっと長くまわるコマを作りたい」という意思が子どもたちの中にあつたため、ジグソー活動でよりよい方法を見つけようとする姿が見られた。

第4回 8月26日(土) 10:30-11:30【コマのまとめをしよう】

1~3回目のコマ作りの講座を通して、児童が学んだことや、できるようになったことをポスターや絵本などでまとめ、それを基に友人に紹介する活動を実施した。個別最適な学びの1つとして、学生が選択肢や環境を用意することで、児童自身で表現の仕方を選択できることを重視した。児童同士が学びを主体的に伝え合う姿から、講座を通じた成長をみることができた。

○冬期「にしなクリスマスキッズパーティー」

第1回 12月3日(日) 10:30-11:30

児童同士の交流を深めるためにアイスブレイクにダンスを踊ったり、異文化に関する○×クイズを行ったりして場の緊張感を和らげると共に異文化理解を図ることができた。ま

た、クリスマスに関わる英単語(reindeer、angel、snowman、star、Christmas stocking)を使い、グループに分かれてツリーの飾り付けを行うことで協働性を取り入れた。

第2回 12月10日(日) 10:30-11:30

第1回で学習した英単語をアイスブレイクのパズルゲームを中心に復習し、定着させることができた。また、自分の思いを他者に伝えるために、思いを伝えたい対象に合わせた材料を選び、グループで協力してオーナメントを作成した。さらに、英語を書いたり読んだりして、一人一人が積極的に英語に触れながら自分の思いを形にすることができた。

### 3. 事業成果

夏期、冬期共に「協働的な学び」を意識し、体験的な活動を取り上げ、グループでの話し合い活動を中心に活動の構想を行った。それによって、昨年度に比べて積極的に他者とのかかわる姿が見られ、対話活動が活発に見られた。

夏期講座の活動は“コマをいかに長くまわすか”という課題解決的な活動であったため、活動の中に躓きが生まれ、それを解決しようと他者とのかかわる姿が全体を通して多く見受けられた。活動はグループ単位を基本とし、毎回の活動前にグループ協力型のアイスブレイクを取り入れたことで、主活動の話し合い等にもスムーズに入ることができた。活動後に実施した学生の反省では、「対話について考えたこと・実行したこと」を中心にアンケートを取った。その中で、自分の働きかけによって生じた児童の行動から考察している意見や環境作りや教材選択の大切さに言及したものもあり、それぞれが「協働的な学び」「個別最適な学び」について考える機会となった。

冬期講座では、夏期講座で得られた考察や新たな課題を踏まえて活動を行い、夏期講座と比べて、児童が話しやすい雰囲気作りに努めることができた。また、「他者に思いを伝える」という活動を通して、誰かに支えられていることに気づき感謝するなど、道徳的な要素も取り入れることができた。児童は英語や絵を使い、自分の表現で思いを伝えている様子が見られた。グループ活動では児童を主体としつつ、グループにつく学生在、児童の実態を踏まえ声をかけるなど、適切な手立てについて考えることができた。

### 4. 今後の展開

これまで、「児童間の協働的な学び」を意識した活動に取り組み、児童間の関係を深める手立てについて模索し、検討することができた。今後はさらに「主体的・対話的で深い学び」に焦点を当て、自分の思いを表現するだけでなく、相手の考えを基に自分自身の考えを深めることができる質の高い対話を目指すと共に、児童自らが判断する機会を設け、主体性を育てていく。そのために、学生の思考力や行動力に対する意識を高めていく。



## ①はじめに（取組・研究の背景）

今日の教育には「主体的・対話的で深い学び」「協働的な学び」「個別最適な学び」が求められているが、このような教育を受けてきていない学生にとって、これらを具体的に想像し、実施することは難しい。そこで、学生が“今求められている教育の在り方”について、地域の児童との活動を通して、具体的に理解すること、学生同士で協議することで考えを深めていくことを背景としている。

## ②目的

本事業では、学習指導要領にある「主体的・対話的で深い学び」「協働的な学び」「個別最適な学び」を意識したものであり、参加する児童の学習観、学生の指導観の変容を目指したものである。本年度は、児童の対話活動の内容を観察・分析することや個別最適な学びの手立ての模索をすることを通して、『児童間の協働的な学び』の実現を考察することを目的とした。

## ③講座の内容・成果

小学2～5年生を対象に、西奈生涯学習センターにて講座を企画した。

### ●夏期【長くまわるコマを作ろう】

3～4人のグループに分かれて“長くまわるコマを作る”という課題のもと活動を行った。どうすれば長くまわるコマを作れるだろうかと、複数の材料の中から最適解を見出そうと他者と話し合う様子が見られ、協働的な学びを実現できた。最終回には、コマの紹介を行い、個々にあった表現方法を自らが選択することで、個別最適な学びを試行することができた。

### ●冬期【見習いサンタになって身近な人に想いを伝えよう】

夏期講座を踏まえて、話しやすい環境作りに配慮したことで、積極的にかかわり合う様子が見られた。また、誰かに支えられていることに気づき感謝するなど、道徳的な要素を取り入れた活動を行うことができた。

## ④今後の展望

「主体的・対話的で深い学び」に焦点を当て、自分の思いを表現するだけでなく、相手の考えを基に自分自身の考えを深めることができる“質の高い対話”を目指す。また、児童自らが判断する機会を設け、主体性を育てていく。

## しずおか「親子で行ける自然体験の場」の提案

所属：小杉山ゼミ

社会環境学部 関野翔太（代表）、繁竹快斗、齊藤晃佑、酒井萌希、佐藤恵亮、杉村翼、  
中島豪晟、村松虎太郎、大芝風清、加藤舞、三浦良介

### 1. 目的・概要

現在日本では、子供たちの自然離れが問題となりつつある。昔から子供は自然の中で遊びを編み出し、自然を介してコミュニケーション能力の向上や運動能力の向上を図っていた。それらのことが SNS の普及や遊ぶ場所の減少などによって難しくなっているといった現状がある。そのため私たちは、ビオトープにおける環境プログラムを企画運営することによって子供たちの自然離れからの脱却を図り生物に少しでも興味を持ってもらい、将来、生物多様性の保全の担い手を増やすことを目的として活動してきた。

今回の主な活動は、このマップを活用し、巴川の各地に「自然体験の場」を見つけ、市民に広く提案することを目的とした。

今回の実績として、静岡ガス㈱との連携事業である自然体験プログラムの改善を実施した。静岡ガス㈱の工場内ビオトープは、巴川につながる放水路のすぐわきに立地する。また、静岡県土木事務所との提携により、巴川と長尾川の間、自由に計画できる自然体験の場を設置することも実現させた。

### 2. 事業内容・方法

本事業では、以下の事業を計画・実施した。

#### ① 自然体験の場の探索

「親子で行ける自然体験の場」を探す目的で、巴川をぐるりと囲む産地のハイキングコースの現地踏査を行った。踏査の対象としたハイキングコースは以下の通りである。

- ・梶原山コース
- ・谷津山コース
- ・賤機山コース

#### ② 静岡ガス㈱工場内ビオトープでの自然体験プログラムの企画・運営

静岡ガス㈱ビオトープでは、静岡市立東豊田小学校と静岡市立西豊田小学校の児童を招いて環境教室を4日間にわたって行った。葉脈標本やどんぐり拾いを通じて自然環境が身近に存在することを確認してもらうことが目的である。

#### ③ 静岡県土木事務所との連携事業（リバーフレンドシップ協定）

土木事務所と提携した堤防を自分たちで整備して生物が呼び込みやすい環境やビオトープを作ることが目的である。また、800m という広大な範囲を持つ為、様々な活動が行える場所として早期に完成を目指したい。

#### ④ 静岡埋蔵文化財センターに訪問

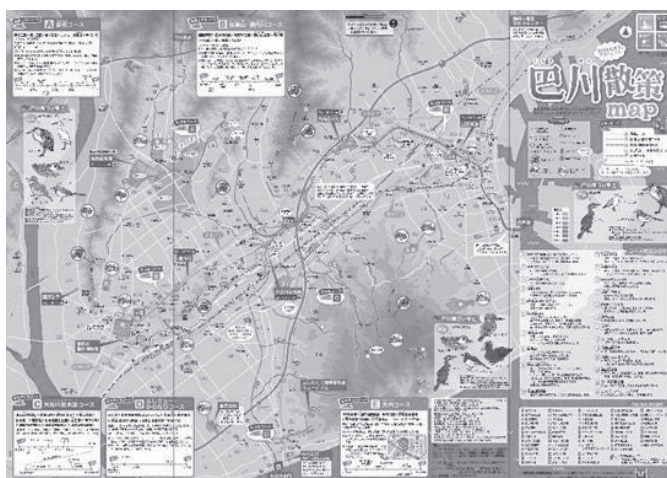
古墳や遺跡の時代ごとの移動を追跡し、それに基づいて海進海退の線をマップ上に描き出し、その情報を巴川形成の説明に活用することを目的とし、正確な情報を得るために静岡市埋蔵文化財センターに協力を依頼し、時代ごとの遺跡や古墳の移動について学びに向かった。

### 3. 事業成果

#### ① 「巴川散策マップ」の改訂

今年度の新しい企画を進める過程で、「マップ」の改訂を進めることができた。この中に今回のテーマである「親子で行ける自然体験の場」を掲載することができた。

梶原山コースは道が舗装されており、坂は少し急なもの、大変歩きやすいコースとなっていた。元々ハイキングコースとして人気があり、道中や山頂では登山者が多く見られた。道路が整備されているため、良く目を凝らさないと生き物は観察しづらいかもしいが、山頂からの景色は絶景であり、年末には初日の出を拝みに人で溢れかえるのが恒例の景色となっている。



図：改訂版「巴川散策マップ」

谷津山コースは全体的に見晴らしがよいポイントも多く、ハイキングコースがよく整備されていて、自然を堪能しながら楽しく歩くことができた。谷津山は市街地に近く、お年寄りや家族づれ、幼稚園のハイキング等様々な人たちと出会った。春の谷津山では昆虫やギンヤンマ・モンキアゲハ・アオスジアゲハなどのチョウ類、野鳥ではウグイス、メジロなどを見ることができた。

賤機山コースは、木々や草が生い茂っており、見晴らしの良い休憩場からは、静岡市全体まで見渡せることができた。道中ではナナフシや多種のチョウなどの昆虫を確認できた。市街地から近く、且つ浅間神社の参道でもある賤機山ハイキングコースは、参拝者や登山者が多く見受けられ、有名であると同時に地域からとても大切にされている事が分かった。

#### ② 静岡ガス(株)工場内ビオトープでの自然体験事業の改善

集合場所に関する改善や標本の説明の工夫、また全体的な時間の配分が改善点として挙げられたが、時間の限られた中でも多くの小学生たちが楽しそうに活動し、拾ったどんぐりを笑顔で持って帰ってくれたりするなど、自然に興味を示してくれた。

#### ③ 静岡県土木事務所との提携事業

土木事務所と提携した堤防は約 800m あるが、現段階では土木事務所の方々が草刈りなど

を行ってくださった。今後は自分たちで土壌整備をしながら生態系を再生させるビオトープを作り上げ、畑を作ったり花など植えて自分たち好みのスペースにできたら良いと考えている。

#### 4. 今後の展開

巴川散策マップは完成したため次は小学校などでの配布を行いたいと考えている。そして配布先では散策マップの説明会を行う予定である。

巴川散策コースや既存のハイキングコースでの「自然体験」プログラムを作成し、地域のNPOなどと連携しつつ、それを具体化していく。特に、上流部の麻機緑地では、すでにプロジェクトが始まっている。また、静岡ガス(株)との連携で進めている工場内ビオトープの活用は、その先に「環境省自然共生サイト」への登録も見据え、さらに効果的な自然体験プログラムの検討を進めている。土木事務所と提携した堤防の利活用は今後の課題であるが、大学から歩いて5分という立地条件を活かして、積極的な利用を検討中である。

# しずおか「親子で行ける自然体験の場」の提案

常葉大学 社会環境学部 小杉山ゼミ

齊藤晃佑 酒井萌希 佐藤恵亮 杉村巽 中島豪晟 村松虎太郎

大芝風清 加藤舞 繁竹快斗 関野翔太 三浦良介

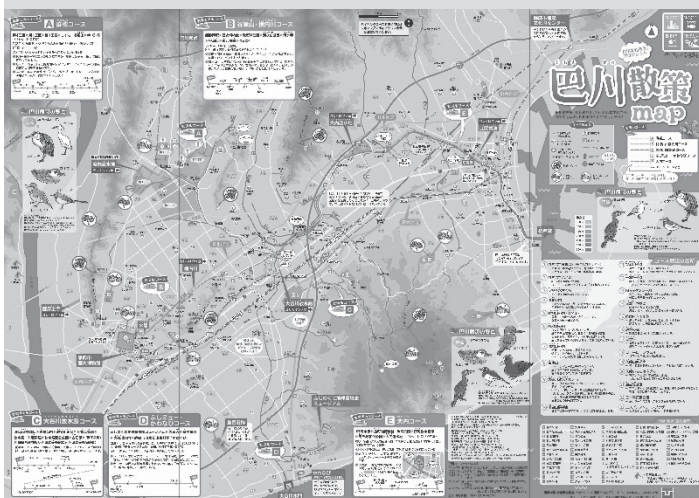
## プロジェクトの成果

最近、全国で子供たちの自然離れが懸念されている。そこで、私たちはこの問題に歯止めをかけるために多くの自然体験教室を開催してきた。その一環で作成した「巴川散策マップ」を今年度は改訂し、地域の小学校に配布を計画している。また、静岡県土木事務所のリバーフレンドシップ制度に登録し、堤防の自然再生を行っている。さらに、巴川流域にある静岡ガス(株)の工場内ビオトープを活用した自然体験プロジェクトも進行中である。



静岡ガス工場内ビオトープでの自然体験の様子

## 散策マップ改訂



昨年度作成した「巴川散策マップ」を、今年度の目標に即して改訂した。

大きな改訂は、「親子で行ける自然体験の場」を具体的に示した部分である。

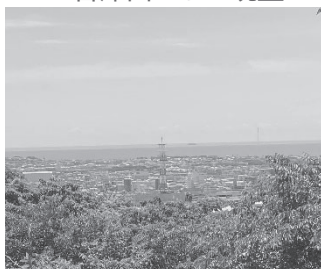
### 【主な改訂】

- ・ 周囲の山地にあるハイキングコースの追加 (梶原山、賤機山、谷津山)
- ・ 静岡市埋蔵文化財保護センター、古墳跡の追加

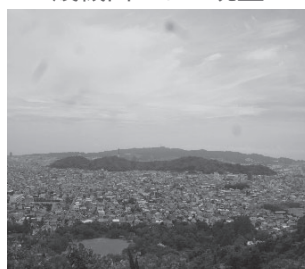
梶原山



谷津山からの眺望



賤機山からの眺望



埋蔵文化財センター



**プロジェクトの将来** 現在、世界中で野生生物の個体数、種数の激減が続々と報告され、これと連動して人々の自然離れも深刻化している。将来を担う私たちの役割のひとつが、この自然離れに歯止めをかけることである。巴川を中心に、今後も自然体験の場作りを進めていきたい。

## SDGs で富士市・富士宮市を元気にしたい！

所属：三井・池田ゼミ

社会環境学部 三井萌音(代表)、小倉静香、森岡一樹、太田拓海、中西幸輝、山崎大空、  
山田晴也、佐藤惇史、小林航大、鈴木友哉、米山拳世、鈴木健紘、出口七海、  
佐藤直弥、麻場結衣、松井徳孝、橋本稜太郎、川口太久海

### 1. 目的・概要

昨年度、イオンタウン富士南にて「SDGsをもっと知ろう！」イベントが開催された。SDGsへの理解を促進するため、企業や団体、個人等多くの参加者が集ったが、話を聞いてくださる方が非常に少なかった。せっかくイベントを開催しても、人が集まらなければ周知には至らない。そこで、本プロジェクトでは、我々三井・池田ゼミの学生が主体となり、イベントの企画・立案・実施までを担う。昨年度とは変わり、単に成果発表を行うだけでなく、多くの人が馴染みやすい企画を催すことで、集客力を高め、1人でも多くの方にSDGsへの理解を深めてもらえるようにする。

また、本イベントのみならず多くのイベントやフェスティバルへの出展を通して、我々のSDGsを意識した活動内容や社会的意義を広く周知する。

### 2. 事業内容

【8/5(土) 第4回みんなのSDGs宣言(イオンタウン富士南) 12:00~16:00】

5月頃から学内に向けた出演者の呼びかけや、発表テーマの話し合い等を開始した。出演者は、常葉大学社会環境学部から山田ゼミ、黒田ゼミ、池田ゼミ、三井ゼミの4ゼミが登壇した。その他には、富士市立高等学校、静岡ガスエネリアショールーム富士、そうごう薬局富士南店にそれぞれのテーマで発表を行っていただいた。

司会や音響機器の操作などは学生が行い、また、SDGsに関するクイズを出題し、参加者には景品をプレゼントするなどの工夫を取り入れた。





【10/28(土) Organic Summit 2023 (ふもとっぱら)】

Organic Summit 2023 は、有機栽培で育てられた農作物や飲食物の販売、環境保護や自然との共生等を考える講演や歌唱ステージなど、自然や自身の健康について考えることを目的として、本年度初めてふもとっぱらで開催されたイベントである。

このイベントにおいて、私たちの大豆・水稻栽培等、SDGs に関わる日頃の活動の紹介・説明を行った。また、会場設営や当日の受付も行い、イベント運営に携わった。



【11/11(土) 第5回みんなのSDGs宣言(イオンタウン富士南) 12:00~15:20】

今年度2回目の「みんなのSDGs宣言」では、前回の反省を踏まえ、小中学生などの若い世代により関心を抱いてもらえるようなイベントづくりに励んだ。

出演者は、常葉大学社会環境学部からは前回に引き続き我々三井・池田ゼミ、富士市立高等学校、そして新たに、静岡県立大学と青山学院大学共同で行われたワークショップ事業の紹介、Radio-f 富士コミュニティエフエム放送株式会社の高校生記者による発表が行われた。

また、新たな試みとして、イベント中盤でLIVEcapsule 静岡校によるKpopダンスが披露された。

今回は、前回より多くの方に足を止めてもらえるよう、SDGs くじ引き大会を実施した。SDGs17の目標ごとに問題が書かれたくじを用意し、答えてもらうことで景品をプレゼントした。



【11/26(日) 第8回古民家フェスティバル(SOYハウス) 10:00~15:00】

本イベントでは、その他イベント出展時同様に、大豆・水稲栽培等の農業活動からつながるSDGsに関わる取り組みを紹介した。

また、SDGsに関連した宝探しゲームや、どんぐり・松ぼっくりなどの木の実を用いてつくるネイチャークラフト、子どもたちへの絵本の読み聞かせなど、多くの催しを企画・実施し、子どもから大人まで体験しながら楽しんで学べるイベントとなった。



### 3. 事業成果

「みんなのSDGs宣言」では、本事業で企画・運営を行い、ただ活動紹介や発表を行うだけでなく、SDGsに関するクイズ大会やくじ引き大会を企画し、SDGsに親しみやすいイベントにしたことで、幅広い世代の多くの方に気軽に学んでもらい、また関心をもってもらえることが出来た。また、我々の日々の活動周知について、今年度はメディア出演を果たしたこともあり、大豆やお米の有機栽培、栽培した大豆を用いた豆腐・味噌への加工など、当ゼミならではの活動を多くの方々に関心をもってもらえることが出来た。

本事業により、一般市民のSDGsへの関心・認知度の更なる向上のみならず、常葉大学と地域の関係性の強化、さらには社会環境学部の認知の高まり等の効果が得られたのではないかと思う。

### 4. 今後の展開

これまでに引き続き、富士市・富士宮市を拠点にした農業・広報活動を進めていきたい。また、今回の「みんなのSDGs宣言」や「古民家フェスティバル」のように学生自らがイベント運営に関わることで、人々の注目が集まることが分かった。そのため、これからは学生自身で考え、実行していけるようなイベントの企画・運営を積極的に行いたい。

更に、静岡市や県西部にも活動範囲を広げ、我々について知っていただくだけでなく、環境問題や自身の健康などについて考えていただくきっかけをつくっていかれたらと考えている。

連携先：富士市、南条の里農地保全会、officePturn、イオンタウン富士南、SOYハウス、ふもとつばら

## 目的・背景

昨年度、イオンタウン富士南にて「SDGsをもっと知ろう！」イベントが開催された。SDGsへの理解を促進するため、企業や団体、個人等多くの参加者が集ったが、話を聞いてくださる方が非常に少なかった。そこで、本プロジェクトでは、我々三井・池田ゼミの学生が主体となり、イベントの企画・立案・実施までを担い、多くの方が馴染みやすい企画を催す。それにより集客力を高め、1人でも多くの方にSDGsへの理解を深めてもらえるようにする。

また、本イベントのみならず多くのイベントやフェスティバルへの出展を通して、我々のSDGsを意識した活動内容や社会的意義を広く周知する。

## 活動内容

### ■ みんなのSDGs宣言

#### 8/5(土) 第4回みんなのSDGs宣言

常葉大学社会環境学部から山田ゼミ、黒田ゼミ、池田ゼミ、三井ゼミの4ゼミが登壇。その他には、富士市立高等学校、静岡ガスエネリアショールーム富士、そうごう薬局富士南店に、発表を行っていただいた。



#### 11/11(土) 第5回みんなのSDGs宣言

今年度2回目の「みんなのSDGs宣言」の出演者は、常葉大学社会環境学部からは前回に引き続き我々三井・池田ゼミ、富士市立高等学校が登壇。そして新たに、静岡県立大学と青山学院大学共同で行われたワークシェア事業の紹介、Radio-f富士コミュニティエフエム放送株式会社の高校生記者による発表が行われた。また、新たな試みとして、イベント中盤でLIVECapsule静岡校によるK-popダンスが披露された。



### ■ Organic Summit 2023 (ふもとつぱら)

#### ■ 第8回古民家フェスティバル(SOYハウス)

両イベントにおいて、私たちの活動の1つである大豆・水稻栽培等、SDGsに関わる日頃の活動の紹介・説明を行った。

昨年度に引き続き参加した古民家フェスティバルでは、多くの催しを学生自身で企画・実施した。内容としては、SDGsに関連した宝探しゲームや、どんぐり・松ぼっくりなどの木の実を用いてつくるネイチャークラフト、子どもたちへの絵本の読み聞かせなど、世代に関わらず多くの方が体験しながら楽しんで学べるイベントとなった。



## 結果と考察

みんなのSDGs宣言では、活動紹介や発表を行うだけでなく、クイズ大会やくじ引き大会を実施したことで、幅広い世代の多くの方に興味をもっていただけた。

また、本年度の我々の活動周知では、多くのイベントへ出展を果たしたことで、一般市民のSDGsへの関心・認知度の更なる向上のみならず、常葉大学と地域の関係性の強化、さらには社会環境学部の認知の高まり等の効果が得られたのではないかと思う。

## 今後の展望

これまでに引き続き、富士市・富士宮市を拠点にした農業・広報活動を進めていきたい。

また、今回の「みんなのSDGs宣言」や「古民家フェスティバル」のように学生自らイベント運営に関わる機会を増やしたいと考える。

今後は、静岡市や県西部にも活動範囲を広げ、多くの方の応援・協力を得られるようにしたい。

## 三保半島のプラごみ調査 ～アクセサリ体験会を添えて～

所属：山田建太ゼミ

社会環境学部 稲葉あすなる（代表）、木谷優宏、堀之内裕咲、増田圭太、三木感大、望月柊弥

### 1. 目的・概要

近年、プラスチックごみ（以下、プラごみ）の海洋流出や、それに起因する海洋生物への影響が報道されており、世界的な関心事となっている。海洋プラごみの多くは、陸域から河川を介して海洋に流入していることが指摘されている<sup>1)</sup>。

本研究室では、昨年度から地域の河川である巴川に散乱するプラごみを調査してきた。その結果、散乱の実態やホットスポットを明らかにし、対策を議論してきた。また、調査から得られた成果を、一般向けのイベントやホームページ等で発表・発信してきた<sup>2,3)</sup>。

本プロジェクトでは、継続して巴川でプラごみの散乱を調査するだけでなく、地域の海岸である三保内浜海水浴場の海岸も調査対象とした。また、得られた情報を一般に発信することで、プラごみ問題について啓発することを目的とした。今年度は、プラごみのリサイクル方法を分かりやすく伝えるために、ペットボトルのキャップを再利用したアクセサリ作りのワークショップも計画した。一般の方々でも作りやすく、子供でも楽しめることから、プラごみ問題の啓発活動につなげることができると考えた。

### 2. 事業内容・方法

三保内浜海水浴場の海岸で、5月18日に散乱ごみの調査を行った。調査地を図1に示す。調査方法は、海辺の漂着物調査マニュアル<sup>4)</sup>を参考にした。一つの区画を10m×10mとし、4区間でごみを採取し、種類と個数を記録した。海岸線から10m陸地側に区画を二つ（A1、A2）、さらに10m陸地側に二つの区画（B1、B2）を設定した。



図1 調査地の地図と三保内浜海水浴場の調査地点の写真

巴川の調査では、川沿いを歩いて河川表層や護岸に散乱するごみを確認し、動画及び写真に記録した。調査範囲を6区間に分けて、10月～12月に調査を実施した。上流の区間1は、葵区北周辺、区間2は麻機遊水地周辺、区間3は葵区上土周辺、区間4は葵区古庄周辺、区間5は清水区長崎周辺、最も下流の区間6は清水区本町周辺とした。この調査では、GoProを用いることで動画の記録だけでなく、詳細な位置情報も記録した。GoProで記録さ

れた位置情報は、QGISによる解析のために利用した。

プラごみ問題やプラスチックのリサイクル方法を多くの人に知ってもらうために、各種のイベントでブースを出展し、本プロジェクトの活動や成果を発信した。ペットボトルのキャップを再利用したアクセサリ作りのワークショップを通じて、プラごみ問題について関心を持ってもらえるよう工夫した。ポリプロピレン製のペットボトルのキャップを細かく細断し、金属製の型にいれて、アイロンで180°Cに加熱し、冷却することで様々な形に成型できるようにした。このイベント活動の際、GoProで撮影した動画を流しながら説明することで、一般の方により興味や関心を持ってもらうことを目指した。

### 3. 事業成果

三保内浜海水浴場の4区画(計400㎡)で採取された散乱ごみは、合計1237個であり、そのうち1166個(96%)がプラスチック類であった。プラごみをさらに分類し表1に示す。プラごみ類の中で最も多かったのは、サイズが5mm以上の破片が985個であり、何らかのプラ製品が劣化、破碎され破片となったものと推測された。次いで、袋類が60個、雑貨類52個と続いた。また、雑貨類の52個のうち49個がタバコフィルターであった。タバコフィルターの素材には、半合成ポリマーの酢酸セルロースが使用されており、プラスチックの一種である<sup>5)</sup>。

表1 三保内浜海水浴場で採取されたプラごみの分類と個数

分類	A1	A2	B1	B2	合計
袋	26	13	12	9	60
ボトル	1	0	0	0	1
容器	6	1	3	4	14
ひも	26	4	11	5	46
雑貨	43	7	2	0	52
漁具	5	1	2	0	8
破片	300	103	381	201	985
合計	407	129	411	219	1166



図2 調査で採取されたプラごみの写真

巴川で散乱ごみを調査した結果、全区間で確認されたごみの総数は、444個であった。ごみの種類と個数を表2にまとめて示す。このうち、明確にプラごみと判断できるプラ製の袋やペットボトルなどは、全部で150個であった。昨年度の調査では、散乱プラごみは全部で181個であり、類似した結果と言える。

最も散乱ごみの数が多かった区間5の長崎周辺では、プラ製の袋が36個と最も多かった。また、区間2の麻機遊水地周辺も106個のごみが確認された。この区間では、オーブントースターやポットなど不法投棄と思われる家電製品も認めら

表2 巴川に散乱していたごみの分類と個数

分類	区間1	区間2	区間3	区間4	区間5	区間6	合計
空き容器	2	5	9	3	23	1	43
プラ製の袋	5	6	6	7	36	13	73
ポール					1	1	2
お菓子の袋		1	2		6	11	20
空き缶	1	1	4		10	2	18
ペットボトル	1	3	20	1	11	1	37
牛乳パック			2			2	4
新聞紙						1	1
ティッシュ						2	2
テープ類					6	1	7
マスク		2	1		2	1	6
紙	2	10	1		10		23
布			1		1		2
ライター					1		1
タバコ類			1		1		2
破片	54	77	41	2	21		195
発泡スチロール			1	1	2		4
皿		1			1		2
家電製品					2		2
合計	65	106	89	14	134	36	444

れた。昨年度の調査では、その地点でごみは認められていないことから、最近不法投棄された可能性がある。調査で確認されたごみの写真を図3に示す。



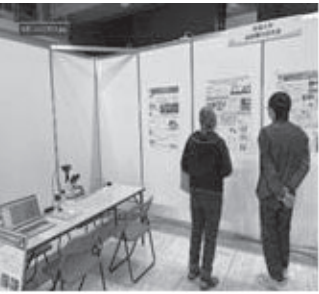


図3 巴川本川で確認されたプラごみの写真

啓発活動として一般向けのイベントでブース出展及び企画展示を行い、本研究室の活動や成果について発表するだけでなく、ペットボトルのキャップを再利用したアクセサリ作りの体験ワークショップも開催した。また、8月には富士市で開催されたイベント「第4回みんなのSDGs宣言」に参加し、研究室の活動内容を発表した。出展したイベントを表4にまとめて示す。また、図4に手作りアクセサリの写真を示す。



図4 ワークショップで作成した手作りアクセサリ

イベント	大学祭（静岡市）	サイエンスイベント（富士市）	ヒガンフェスティバル（静岡市）
時期	11月4日(土)・5日(日)	11月5日(日)	11月23日(木)
参加者数	約100名	約60名	約30名
写真			
会場の様子	行列ができるほど盛況だった。家族での参加や学生の参加が多かった。	主な参加者は小学生とその保護者。調査内容を熱心に聞いてくれる保護者もいた。	幅広い年齢層の参加が見られた。調査内容をまとめたポスターを熱心に見て質問してくれる参加者もいた。

#### 4. 今後の展開

本年度の調査結果について、今後、SNS 等も活用して情報を発信し共有することで不法投棄の抑制、河川及び海岸におけるボランティアの清掃活動の参加数増加に繋げたい。イベントで、オリジナルアクセサリ作りのワークショップを実施することで、内容に興味を示す参加者が増えたと感じた。今後、イベント等に出展する際に、アンケート調査を行い、プラスチック問題に対する意識調査や意識の変化を確認したい。

<sup>1)</sup> Jambeck et al., Plastic waste inputs from land into the ocean, *Science*, **347**, 2015

<sup>2)</sup> 地域の河川や海岸のプラスチックごみやマイクロプラスチックによる汚染の実態調査と啓発活動, [https://www.tokoha-u.ac.jp/media/2023\\_sdgs74.pdf](https://www.tokoha-u.ac.jp/media/2023_sdgs74.pdf)

<sup>3)</sup> 常葉大学社会環境学部環境化学研究室ホームページ, <https://sites.google.com/view/tokoha-u-envchem>

<sup>4)</sup> 公益財団法人環日本海環境協力センター, 海辺の漂着物マニュアル (2023 年度)

<sup>5)</sup> Yadav and Hakkarainen, Degradable or not? Cellulose acetate as a model for complicated interplay between structure, environment and degradation, *Chemosphere*, **265**, 2021

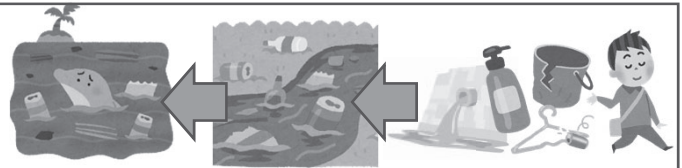
# 三保半島のプラごみ調査 ～アクセサリ体験会を添えて～

常葉大学 山田建太ゼミ

稲葉あすなろ 木谷優宏 堀之内裕咲 増田圭太 三木感大 望月柊弥

## 背景

- 近年、プラスチックごみ（以下、プラごみ）の海洋流出が、世界的な関心事となっている。海洋プラごみの多くは、陸域から河川を介して海洋に流入していることが指摘されている。
- 本研究室では、昨年度から地域の河川である巴川に散乱するプラごみを調査してきた。また、調査から得られた成果を、一般向けのイベントやホームページ等で発表・発信してきた。
- 本プロジェクトでは、巴川だけでなく、三保内浜海水浴場の海岸でも散乱ごみの調査を行い、得られた情報を一般に発信することで、プラごみ問題について啓発することを目的とした。



年間800万トンのプラごみが海洋に流出 河川は陸域のプラごみを海洋に運ぶ主要な経路 プラごみを含む海洋ごみの約8割は陸域に由来

**目的：地域河川や海岸のプラごみによる汚染実態の調査  
プラごみ問題に関する啓発活動**

## 内容・方法

**三保内浜海水浴場の海岸における散乱ごみ調査：**5月18日に散乱ごみの調査を行った。調査地を図1に示す。調査方法は、海辺の漂着物調査マニュアルを参考にし、一つの区画を10m×10mとし、4区間でごみを採取し、種類と個数を記録した。  
**巴川における散乱ごみ調査：**川沿いを歩いて河川表層や護岸に散乱するごみを確認し、動画及び写真に記録した。調査範囲を6区間に分けて、10月～12月に調査を実施した。上流の区間1は、葵区北周辺、区間2は麻機遊水地周辺、区間3は葵区上土周辺、区間4は葵区古庄周辺、区間5は清水区長崎周辺、最も下流の区間6は清水区本町周辺とした。



図1 調査地の地図と写真

**啓発活動・イベント出展：**プラごみ問題やプラスチックのリサイクル方法を多くの人に知ってもらうために、各種のイベントでブースを出展し、本プロジェクトの活動や成果を発信した。ペットボトルのキャップを再利用したアクセサリ作りのワークショップを通じて、プラごみ問題について関心を持ってもらえるよう工夫した。



ポリプロピレン製のペットボトルのキャップを細かく細断し方に入れる。アイロンで180℃に加熱し、冷却すると様々な形に成型できる。

図2 ペットボトルのキャップを再利用したオリジナルアクセサリ作りの流れ

## 成果

### 三保内浜海水浴場における散乱ごみ調査の結果

4区画（計400㎡）で採取されたプラごみは1166個であった（表1）。プラごみ類の中で最も多かった破片類は985個であり、何らかのプラ製品が環境中で劣化、破砕され破片となったものと推測された。また、雑貨類の52個のうち49個のタバコフィルターであった（図3）。タバコフィルターの素材には、半合成ポリマーの酢酸セルロースが使用されており、プラスチックの一種である。

表1 海岸で採取されたプラごみの分類と個数

分類	A1	A2	B1	B2	合計
袋	26	13	12	9	60
ボトル	1	0	0	0	1
容器	6	1	3	4	14
ひも	26	4	11	5	46
雑貨	43	7	2	0	52
漁具	5	1	2	0	8
破片	300	103	381	201	985
合計	407	129	411	219	1166



図3 海岸で採取した散乱ごみの写真

### 巴川における散乱ごみ調査の結果

巴川で散乱ごみを調査した結果、全区間で確認されたごみの総数は、444個であった（表2）。明確にプラごみと判断できるプラ製の袋やペットボトルなどは、全部で150個であった。昨年度の調査では、散乱プラごみは全部で181個であり、類似した結果と言える。最も散乱ごみの数が多かった区間5の長崎周辺では、プラ製の袋が36個と最も多かった。また、区間2の麻機遊水地周辺も106個のごみが確認された。この区間では、オーブントースターや電気ポットなど不法投棄と思われる家電製品も認められた（図4）。昨年度の調査では、その地点で散乱ごみは認められていないことから、最近不法投棄された可能性がある。

表2 巴川に散乱していたごみの分類と個数

分類	区間1	区間2	区間3	区間4	区間5	区間6	合計
空き容器	2	5	9	3	23	1	43
プラ製の袋	5	6	6	7	36	13	73
ボール					1	1	2
お菓子の袋		1	2		6	11	20
空き缶	1	1	4		10	2	18
ペットボトル	1	3	20	1	11	1	37
牛乳パック			2			2	4
テープ類					6	1	7
マスク		2	1		2	1	6
紙類	2	10	1		10	3	26
布			1		1		2
ライター					1		1
タバコ類				1	1		2
破片	54	77	41	2	21		195
発泡スチロール			1	1	2		4
家電製品・陶器		1			3		4
合計	65	106	89	14	134	36	444

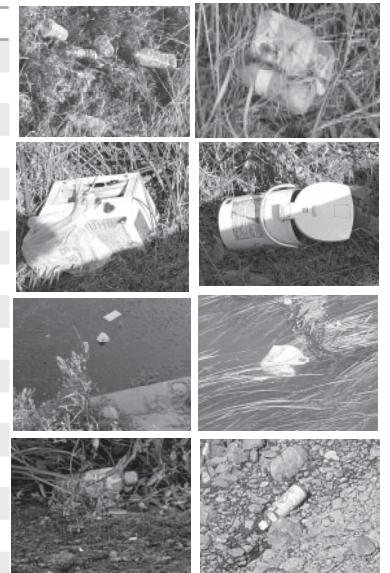





図4 巴川で確認された散乱ごみの写真



図5 巴川で確認されたごみの散乱地点

## 啓発活動・イベント出展

表4 本プロジェクト内容に関するイベント参加

イベント	第4回みんなのSDGs大学祭（静岡市） 宣言（富士市）	サイエンスイベント（富士市）	ヒガンナンフェスティバル（静岡市）
時期	8月5日（土）	11月4日（土）5日（日）	11月23日（木）
参加者数	約30名	約100名	約60名
写真			

**会場の様子** 研究室の活動やこれまでの成果を発表した。高校生の参加も見られた。行行列ができるほど盛況だった。家族での参加や学生の参加が多かった。主な参加者は小学生とその保護者。調査内容を熱心に聞いてくれる保護者もいた。幅広い年齢層の参加が見られた。ポスターを熱心に見て質問する参加者もいた。

## まとめと今後の展望

地域の河川や海岸におけるプラスチックごみ汚染の実態を、調査によって把握することができた。

調査によって得られたデータに基づいた啓発活動を実施することができた。また、ペットボトルのキャップを再利用したアクセサリ作りのワークショップは、プラごみ問題やリサイクルについて考えてもらうきっかけとして効果が期待できると感じた。

今後は、SNS等も活用して情報を発信し不法投棄の抑制、清掃ボランティアの参加数増加に繋げたい。また、継続したイベント参加だけでなく、アンケート調査を行い、プラスチック問題に対する意識調査や意識の変化を確認したい。

## 「私たちのハッシュタグ#」常葉企画開発部！

所属：赤塚・山屋ゼミ（保育学部3年）

保育学部 鈴木麻友（代表）、植野紫園、石川映美、大石真未、工藤奈桜、芹澤美空、高井美緒、平野七楓、小林優衣、坂本歩、櫻井恵梨香、鈴木ねね、宮武葵、杉本詩夏、兼子菜々響、鈴木里菜、高鳥玲、増田都羽、持田遥奈、山下舞、山野邊紗耶

### 1. 目的・概要

障害のある人は、障害を理由に表に出て働くことができなかつたり、「ダウン症を売り込んでいる」と心無い言葉を言われたりしていることを知った。その中で私たちは、障害がない人は、障害のある人と関わる機会が少なく、偏見や無知による壁があることが問題なのではないかと考えた。

障害のある人と障害のない人との出会いの場として、福祉作業所の販売会がある。そこで、若者の関心を集めることができれば、福祉授産品（障害のある人が作った商品）を紹介して、障害を持つ人と持たない人を繋ぐことができるのではないかと考えた。

そこで、本プロジェクトでは、若者が興味や関心を持つ商品やデザインを調査し、障害当事者や施設職員と協働し、福祉授産品等の販売促進活動を行う。特に、若者視点の広報に力を入れ、その商品を通じて、障害を持たない人が障害のある人について知るきっかけを作り、偏見や無知による壁を解消することを目的とした。

### 2. 事業内容・方法

#### 1. 福祉授産品販売促進事業「焼きたてメロンパンフェスタ#ほっと一息つきませんか？」の実施

##### ア) 目的

若者が福祉授産品に触れる機会を設けることで、障害のある人と障害のない人を間接的につなぐ機会と場の設定を目的とした。

##### イ) 方法

##### ①協働する施設の決定

協働する施設の選定にあたり、静岡市内の障害者支援施設や就労継続支援施設B型に対して企画説明の場を設けた。そこでの回答をもとに、プロジェクトメンバーにおいて企画が実現可能かどうかを数値化して、静岡市清水区春日の焼きたてメロンパンコロン（以下コロン。運営は就労継続支援B型事業所ボンド）と協働することとなった。当初は、後述の事前調査の結果から、商品のラッピングデザインを考えることを予定していたが、施設の意向と、商品開発では期間と予算が不十分なことから、コロンのチラシ制作とウェルカムボードの制作に携わることとなった。



## ② ウェルカムボードの制作

事前調査（後述）の、「ポップを可愛くしたら福祉授産品を買いたくなる」という回答に着目した、立体型ウェルカムボード（図1）と「商品の説明を分かりやすく工夫すれば買いたくなる」という回答に着目した、コラージュ型ウェルカムボード（図2）の2点を制作した。



▲図1 立体型  
ウェルカムボード



▲図2 コラージュ型  
ウェルカムボード

## ③ パンフレットの制作

事前調査の「どんな人がどんな思いを込めて作っているかが分かる工夫がされていると、福祉授産品を買いたくなる」という結果から、障害のある人の働き方に着目した、絵本式のパンフレットを作成した（図3）。施設利用者が描いた絵を用いて、ひらがなで文章を書いたり、色覚多様性に配慮した配色にしたり、誰にでも読みやすいことを心掛けて制作した。



▲図3 パンフレットの一部

## ④ プロフィール帳風掲示物の制作

商品の制作や販売に携わる障害当事者を知ってもらうことで、偏見を解消することを目的とし、障害のある人の趣味や一日の様子などの情報を入れた、プロフィール帳風の掲示物を制作した。

## ⑤ 動画制作

福祉授産品に触れる当事業のことや、ココンやメロンパン、そこで働く人の思いを分かりやすく伝え、購買意欲を向上させることを目的とし、ニュース風に施設や福祉授産品のことを伝えた。2分程度の動画を、常葉大学草薙C、静岡県立大学で放映した（図4、5）。



▲図4 動画の一部

## ウ) 結果・考察

ココンの利用者・職員と協働し、常葉大学草薙Cサクラコート・グランテーブルにて、令和5年11月22日・12月6日の2日に分けてメロンパンの販売会を行った（図6）。当日は、大学生や地域の方で賑わい、販売をしていた施設利用者の方に「頑張ってください」と応援したり、仕事内容を見て、「私たちと変わらないね」と口に出したりするお客さんが見られた。利用者からは「楽しかった」という感想を得た。



▲図5 こちらのQRコードから動画を見ることができます



▲図6 12月6日のグランテーブルの様子

## 2. 若者を対象とした福祉授産品に関する意識調査

### ア) 目的

若者を対象に、障害のある人や、福祉授産品に関する意識調査を実施し、その現状と課題を明らかにすることを目的とした。

### イ) 方法

福祉授産品販売促進事業前後で、若者を対象とし、Microsoft Forms を用いて、障害のある人や福祉授産品に関する意識調査を計 2 回行った。

### ウ) 結果・考察

事前調査では、大学生および専門学生計 163 名から回答が得られた。約 8 割の学生が福祉授産品を購入したことがないと回答した。また、約半数が福祉授産品を見たことがないと回答した。(図 7)

事業後の調査では、計 103 名から回答が得られ、約 9 割が「動画放映によって、購買意欲が上がった」と回答した(図 8)。また、プロフィール帳風の掲示物を見る前後の印象は、図 9 の回答が得られた。

そして、事業前の調査では、障害のある人が働くことについて、ネガティブなイメージもあったが(表 1)、事業後には、「障害のある人へのイメージが変わった

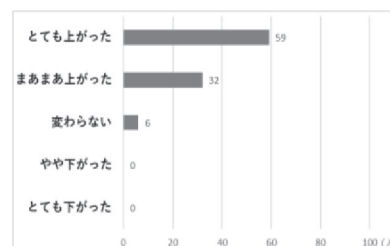
り、身近に感じたりした」という回答が約 7 割であった(図 10)。

以上のことから、福祉授産品を知らない層に興味を持ってもらうには、広報を工夫することで、購買意欲が上がるということが分かった。また、障害のある人と障害のない人を繋ぐためには、お互いを知ることが大切であり、知ることで今まで持っていたイメージを払拭できると考える。

## 3. 今後の展望

私たちは、障害のある人ない人に関わらず、知らないものや知らないことについて、よく分からずにイメージや推測で一方向的に決めつけたり、ある一面だけを見て、「こういう部分があるから、全部がこうだ」と断定したりすることが少なくない。今回の事業を通して、知ることで偏見や間違ったイメージを変えることができると実感した。

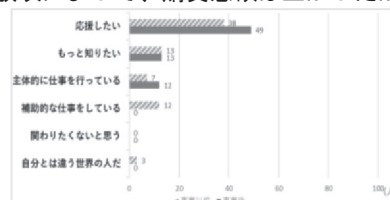
今回の施設との協働だけで終わらせるのではなく、今後、誰でも気軽に参加でき、自然と交流できるような場や機会を作っていくことが、障害のある人とない人の壁を無くしていくことに繋がるだろう。



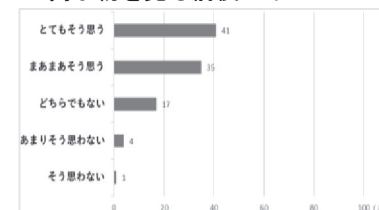
▲図 7 福祉授産品を購入したことがあるか



▲図 8 動画放映によって、購買意欲は上がったか



▲図 9 障害のある人の働き方について、掲示物を見る前後のイメージ



▲図 10 障害のある人へのイメージが変わったり、身近に感じたりしたか

1 意思疎通ができず、難しそう
2 個性を生かせるならよい
3 本人が望むなら良い
4 働きにくい環境が多い
5 突然怒りだしたら怖い

▲表 1 障害のある人が働くイメージ(販売会前)



常葉大学  
TOKOHA UNIV

# 「私たちのハッシュタグ#」常葉企画開発部！

保育学部3年 赤塚・山屋ゼミ

## はじめに

私たちはドキュメンタリーの吃音カフェの映像(日本財団, 2021)の中のインタビューや、ダウン症モデルのNaoさんの記事(2023)から、障害のある人は、障害を理由に表に出て働くことができなかつたり、「ダウン症を売りにしている」と心無い言葉を言われたりしていることを知った。その中で私たちは、障害がない人は、障害のある人と関わる機会が無く、偏見や無知による壁があることが問題なのではないかと考えた。

障害のある人との出会いの場として、福祉作業所の販売会がある。そこで若者の関心を集めることができれば、商品を介して、障害のある人と障害のない人を繋ぐことができるのではないかと考えた。

そこで、本プロジェクトでは、若者や大学生が興味や関心を持つ商品を調査し、障害当事者や施設職員と協働し、福祉授産品等の販売促進活動を行う。特に、若者視点の広報に力を入れ、その商品を通じて、障害のない人が障害のある人について知るきっかけを作り、偏見や無知による壁を解消することを目的とする。

## プロジェクト1: 若者への意識調査

**目的** 障害のある人や福祉授産品に対する意識調査を実施し、その現状と課題を明らかにする。

**方法** 福祉授産品販売促進事業前後で、若者を対象とし、Microsoft Formsを用いて、障害のある人や福祉授産品に関する意識調査を計2回行った。事前調査では、「障害のある人と関わったことがあるか」「福祉授産品を購入したことがあるか」「障害のある人が働くことについてどう思うか」など、軽4項目の質問を実施した。事後調査では、「動画放映によって、福祉授産品の購買意欲は上がったか」「障害のある人のイメージは変わったか」など、計24項目の質問を実施した。

**結果・考察** 事前調査では、大学生および専門学生計163名から回答が得られた。約8割の学生が福祉授産品を購入したことがないと回答した(図1)。また、約半数が福祉授産品を見たことがないと回答した。そして、知らない人にも購買意欲を促すためには、「デザインやラッピングの工夫」、「作った人やその思いが分かること」などが挙げられた。

事業後のアンケートでは、計103名から回答が得られた。「動画放映によって、購買意欲が上がった」という回答が約9割であった(図2)。また、施設利用者のプロフィール帳風の掲示物を見る前の印象は、「応援したい」「補助的な仕事しかさせてもらえない」「自分とは違う世界の人だと思う」などがあった。見た後の印象は、「応援したい」「主体的に仕事を行っている」という回答が、見る前の回答よりも多かった。

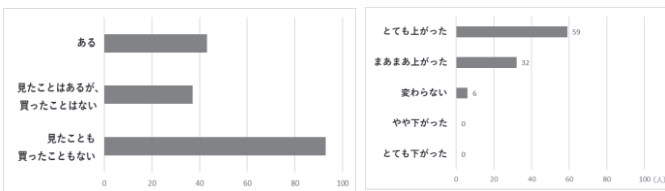
そして、事前調査では、障害のある人が働くことについて、「意思疎通ができず、難しそう」や「突然怒りだしたら怖い」というネガティブなイメージもあったが(表1)、事業後には、「障害のある人へのイメージが変わったり、身近に感じたりした」という回答が約7割であった(図4)。

以上のことから、福祉授産品を見たことがない・買ったことがない層に興味を持ってもらうには、広報や福祉授産品のデザインを工夫することで、

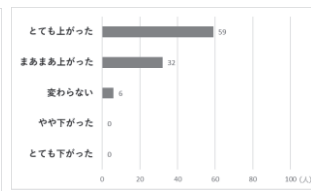
- |   |               |
|---|---------------|
| 1 | 意思疎通ができず、難しそう |
| 2 | 個性を生かせるならよい   |
| 3 | 本人が望むなら良い     |
| 4 | 働きにくい環境が多い    |
| 5 | 突然怒りだしたら怖い    |

▲表1 障害のある人が働くイメージ(販売会前)

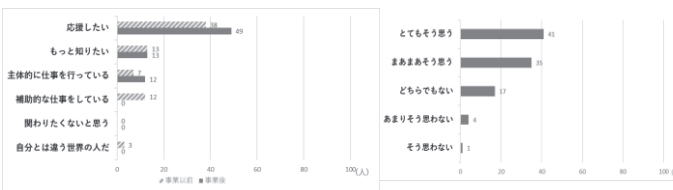
購買意欲が上がるのが分かった。また、障害のある人と障害のない人を繋ぐためには、お互いを知ることが大切であり、知ることによって、今まで持っていたイメージを払拭することができると考える。



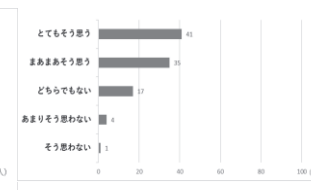
▲図1 福祉授産品を購入したことがありますか



▲図2 動画放映によって購買意欲は上がったか



▲図3 障害のある人の働き方について、掲示物を見る前後のイメージ



▲図4 障害のある人へのイメージが変わったり、身近に感じたりしましたか

## プロジェクト2: 福祉授産品販売促進事業

**目的** 若者が福祉授産品に触れる機会を設けることで、障害のある人と障害のない人を間接的につなぐ機会と場を提供する。

**方法** 焼ききたメロンパンコン(運営:就労継続支援B型ポンド)と協働し、常葉大学草薙Cサクラコート・グラントーブルにて、福祉授産品販売促進事業を、令和5年11月22日・12月6日の2日に分けて開催。メロンパンの販売、(A)ウェルカムボードの公開、(B)パンフレットの配布、(C)利用者さんのプロフィール帳風の掲示物の展示を行った。実施にあたり、常葉大学草薙C・瀬名C、静岡県立大学で(D)動画放映、静岡県立大学でチラシの配架、常葉大学草薙Cおよび草薙駅前でチラシ配り、常葉大学公式Instagramにて宣伝を行った。

### 結果・考察

(A)ウェルカムボード制作: 事前調査の、「ポップを可愛くしたら福祉授産品を買いたくなる」という回答に着目し、立体型ウェルカムボード(図5)と「商品の説明を分かりやすく工夫すれば買いたくなる」という回答に着目し、コラーージュ型ウェルカムボード(図6)の2点を制作した。



▲図5 立体型ウェルカムボード



▲図6 コラーージュ型ウェルカムボード

(B)パンフレット制作: 事前調査の「どんな人がどんな思いを込めて作っているかが分かる工夫がされていると、福祉授産品を買いたくなる」という結果から、障害のある人の働き方に着目し、絵本式のパフレットを作成した(図7)。施設利用者が描いた絵を用いて、ひらがなで文章を書いたり、色覚多様性に配慮した配色にしたり、誰にでも読みやすいことを心掛けた制作した。



▲図7 パンフレットの一部

(C)プロフィール帳風の掲示物: 商品の制作や販売に携わる障害当事者を知ってもらうことで、偏見を解消することを目的とし、障害のある人の趣味や一日の様子などの情報を入れた、プロフィール帳風の掲示物を制作した(図8)。



▲図8 プロフィール帳の掲示物

(D)動画制作: 福祉授産品に触れる当事業のことや、ココンやメロンパン、そこで働く人の思いを分かりやすく伝え、購買意欲を向上させることを目的とし、ニュース風に施設や福祉授産品のことを伝えた。2分程度の動画を、常葉大学草薙C、静岡県立大学で放映した(図9、10)。

当日は、大学生や地域の方で、販売をしていた施設利用者の方に「頑張ってくださ」と応援したり、プロフィール帳風の掲示物を見て、「〇〇が好きなんだ、私と一緒に」と言ったり、仕事内容を見て「私たちと変わらないね」と口に出したりするお客さんが見られた。利用者からは「楽しかった」という感想を得た。



▲図9 動画の一部

プロジェクト1の結果と合わせて、障害のある人へのイメージを変えるには、お互いを知ることが大切であり、障害のある人と障害のない人を繋ぐ場を設定することで、お互いを知ることができたと考える。



▲図10 こちらのQRコードから動画を見ることができます



▲図11 12月6日の様子

## おわりに

私たちは、障害のある人ない人に関わらず、知らないものや知らないことについて、よく分からずにイメージや推測で一方的に決めつけたり、ある一面だけを見て、「こういう部分があるから、全部がこうだ」と断定したりしていることが少なくない。今回の事業を通して、知ることによって偏見や間違ったイメージを変えることができたと実感した。

今回の施設との協働だけで終わらせるのではなく、今後、誰でも気軽に参加でき、自然と交流できるような場や機会を作っていくことが、障害のある人となない人の壁をなくしていくことに繋がるだろう。

## サイエンスカフェ常葉

所属：村井ゼミ

造形学部（3年）：野毛瞳（代表） 須田健史 高島貴美子 鈴木菜摘 櫻井美吹

菊原緋世理 永田花梨 左座彩香 柴田真言 種石汐里 長島彩音

萩間千尋 橋本優月 藤井唯乃 水口梨々菜 森田真凜 山本玲音

小谷紗和

### 1. 目的・概要

【サイエンスカフェ常葉】私たちの所属するゼミでは「人と人とのコミュニケーションの場をデザインする」という学生主体の取り組みとして、サイエンスカフェを実施しています。取り組み としましては、社会や地域が抱える課題に学生が向き合い、専門家の方や地域の方々などを巻き込み、交流の場を作ります。飛び交う言葉や知識を参加者全員が自分ごととして捉え、実感することで、これからの自身の行動を変えるきっかけとなることを目指しています。

また、学生にとっては、サイエンスカフェを実施するにあたり、1 から企画を考え、広報・集客・運営・報告などの経験ができます。それは”場をデザインする”ことの裏方を体験することであり、広報や運営などのそれぞれに必要なフライヤー制作、タイムスケジュールの管理など、造形学部で学んだデザインの実践的な活用や社会活動で身につけるべき力を体験することにつながります。

学生が自ら主体性を育みながら、実践を通して人とのコミュニケーションの場を考え、作ることへの関心を高められる貴重な経験ができるのではないかと考えます。今回はゼミの中で3チームに分かれ、それぞれのチームが異なるテーマでサイエンスカフェを開催します。

【サイエンスカフェとは】サイエンスカフェとは、「研究者と市民と一緒に、科学への理解を深める場所」のことを言います。講演会のような堅苦しい空間ではなく、市民の中に科学者が入っていくという形で、楽しく対話を通して科学について話し合う場です。サイエンスと聞くと、科学のイメージを持ち、難しく感じるかと思います。しかし、話し合うテーマは自由で、普段から考えていなかった題材や関わりがない人々との開かれた交流であるため、誰でも参加しやすいイベントとなっています。

### 2. 事業内容・方法

プロジェクトはサイエンスカフェにおける重要な点を確認、実例を参照した上で3チームに分かれて行いました。

## 1. テーマの考案

サイエンスカフェの目的である、「社会の課題解決」に沿って、自分たちにできること・参加者が意識しやすいことを考え、テーマを決めていきました。具体的には「参加者にとって身近なテーマであるか」、「主体的な学びが得られるか」、「科学的な視点で課題解決や考察ができるか」を考慮しました。できること・やりたいこと・社会から必要とされることの3つを軸に参加者に与えられる学びとは何なのかを考えました。

## 2. 講師・内容の決定

各チームで決定したテーマに即した専門分野を持つ講師の方を選定し、アポイントメントを取りました。

実際にテーマ①「よぞラボ」では鈴木侘音さん（ディスカバリーパーク焼津天文科学館職員）、テーマ②「FOOD TRAP」では佐野文美さん（常葉大学健康プロデュース学部 健康栄養学科准教授）、テーマ③「自分のカラダを知ろう」では吉田早織さん（常葉大学 健康プロデュース学部 心身マネジメント学科准教授）を講師としてお招きしました。講師の方とはメールやオンラインミーティングによる打ち合わせを重ね、テーマの共有、資料・スライドの制作、内容の計画、タイムスケジュールの調整など細かに行っていました。

## 3. フライヤー制作・広報活動

宣伝用のフライヤーを制作し、配布と掲示を行いました。フライヤーのクオリティは集客に大きく影響するため、情報を把握しやすいレイアウト・内容や印象に残りやすいメインビジュアル・宣伝文句を工夫して構成していきます。配布・掲示はより多くの方、特に対象とする層に的確にアプローチするため、児童館や学校などの近隣施設に協力をお願いしました。



## 4. サイエンスカフェの実施

全3チームの取り組みとして、①「よぞラボ」ではディスカバリーパーク焼津にて「光害」により見えづらくなった夜空をテーマに星座やそれにまつわる神話、天文学的知識を勉強するサイエンスカフェを開催しました。②「FOOD TRAP」では「食」にまつわる健康課題をテーマに、栄養バランス、食生活などを講義形式で勉強したのち、学生制作のカードゲームや動画視聴で楽しく食の健康を学べるワークを行いました。③「自分のカラダを知ろう」では現代のこどもの体力低下を課題に、トレーニングや体づくりの正しい知識を学び、適切な指導のもと、スポーツに対して前向きな印象を保つための運動を行いました。

## 5. アンケート集計・活動報告書制作

各サイエンスカフェ内で参加者に回答していただいたアンケート結果を集計し、今後の開催の改善へと役立てます。アンケートではグループごとに設定したテーマの適切度や理解度、満足度や改善点などを分析し、以降の活動へと繋げることが目的です。

### 3. 事業成果・今後の展望

どのチームも15人以上の集客に成功し、イベント内容も充実したものになりました。全体的に参加者からの満足度は高く、「楽しかった」「勉強になった」などの声は励みになりました。適切な難易度、参加者が退屈しない楽しめる内容、専門的な視点から日常の課題にアプローチした知的好奇心を満たすサイエンスカフェのテーマに即した「科学×地域×社会課題の解決」を達成できたのでは無いかと思います。

ただし、開催までの準備、講師側と連携した実施計画やフライヤーでの各方面への広報など、全て学生が企画・運営することは非常に苦勞を要しました。特に、開催近日まで集客状況が芳しくなく、近くの施設や知り合いを頼るなど、広報面が1番の難所でした。その他、急な計画の方向転換、それに準じて制作物を増やしたり、開催場所を変更したりと、大変なことはたくさんありました。改めて、計画性と柔軟な対応力が大切だと思いました。

しかし、こういった中でも一番救われたのはチームワークの良さでした。一人一人が責任ある行動と仲間を思いやる心を大事にできたからこそ当日の成功がありました。皆はじめて立つ企画・運営の立場に困惑したものの、それならではの視点から苦勞を学び、参加者の視点にも立つことで、どのチームもエンターテインメントを忘れない、参加者を楽しませるイベントになったと思います。

この取り組みを通じて、人々の学びへの視野の拡大、新たな交流の場を形作っていくことができるのではないかと考えます。そして、専門家の方や地域の方々などを巻き込み、交流の場をデザインする力を身に付けるべく、私たちの学びも深めて行きたいと思います。



# サイエンスカフェ常葉

常葉大学 造形学部 村井ゼミ 3年

野毛瞳 須田健史 高島貴美子 鈴木菜摘 櫻井美吹 菊原緋世理 永田花梨  
左座彩香 柴田真言 種石汐里 長島彩音 萩間千尋 橋本優月 藤井唯乃  
水口梨々菜 森田真凜 山本玲音 小谷紗和

## 目的・概要

【サイエンスカフェ常葉】私たちの所属するゼミでは「人と人とのコミュニケーションの場をデザインする」という学生主体の取り組みとして、サイエンスカフェを実施しています。取り組みとしては、社会や地域が抱える課題に学生が向き合い、専門家の方や地域の方々などを巻き込み、交流の場を作ります。飛び交う言葉や知識を参加者全員が自分ごととして捉え、実感することで、これからの自身の行動を変えるきっかけとなることを目指しています。また学生にとっては、サイエンスカフェを実施するにあたり、1から企画を考え、広報・集客・運営・報告などの経験ができます。それは「場をデザインする」ことの裏方を体験することであり、広報や運営などのそれぞれに必要なフライヤー制作、タイムスケジュールの管理など、造形学部で学んだデザインの実践的な活用や社会活動で身につけるべき力を体験することにつながります。学生が自ら主体性を育みながら、実践を通して人とのコミュニケーションの場を考え、作ることへの関心を高められる貴重な経験ができるのではないかと考えます。今回はゼミの中で3チームに分かれ、それぞれのチームが異なるテーマでサイエンスカフェを開催します。

【サイエンスカフェとは】サイエンスカフェとは、「研究者と市民と一緒に、科学への理解を深める場所」のことを言います。講演会のような堅苦しい空間ではなく、市民の中に科学者が入っていくという形で、楽しく対話を通して科学について話し合う場です。サイエンスと聞くと、科学のイメージを持ち、難しく感じるかと思いますが、話し合うテーマは自由で、普段から考えていなかった題材や関わりがない人々との開かれた交流であるため、誰でも参加しやすいイベントとなっています。

## 各チーム共通の活動の流れ

テーマ設定	講師決定	内容決定	広報活動	開催	まとめ・集計
サイエンスカフェの目的である、「社会の課題解決」に沿って、自分たちができること・参加者が意識しやすいことを考え、テーマを決めています。	各チームで決定したテーマに沿った専門分野をもつ教授・専門家をリサーチし、アポイントメントをとる。	決定した講師と協働してサイエンスカフェの内容を練っていく。どのような内容なら参加者が意欲を持って参加してくれるか、どのように社会課題にアプローチできるかを考える。	内容・開催日時・参加予定人数・講師・開催場所などが決定したら、フライヤーを制作し広報を開始する。テーマに関連する施設や団体に協力をもちかけ宣伝。	当日は会場準備、参加者受付、司会進行、撮影、片付けまで、全体で4時間ほど(サイエンスカフェ自体は90分ほど)開催。	カフェの振り返り、感想やアンケートを募り、報告書を作成。以降のサイエンスカフェ実施の参考になるよう集計。

## 当日の取り組み(全3チーム)

### ① FOOD TRAP ～あなたも食の落とし穴にはまってるかも？～

私たちは「FOOD TRAP」をテーマに、健康プロデュース学部 健康栄養学科 佐野文美准教授を講師としてお招きし、健康課題の解決法について学ぶイベントを開催しました。イベントには地域の高校生らが参加し、「健康」とは何か、野菜ジュースの注意点やカルシウム不足など、若者が陥りやすい食の落とし穴について学んだうえで、主食・主菜・副菜・その他の4種類のカードから組み合わせる栄養バランスの良い献立を作る「献立づくりカードゲーム」などを行い、自分の健康と食生活について改めて考えなおしました。



### ② 自分のカラダを知ろう ～運動しながら学んで もっとスポーツを楽しもう～

現在、子供の体力低下が問題視されています。子供の体力低下は将来的に生活習慣病の増加やストレスに対する抵抗力の低下などを引き起こす可能性があります。体の動きが鈍くなり、運動が苦手な人が増え、スポーツに対して悪い印象を持つ人が増えてしまうでしょう。その背景には、生活が便利になったことで運動する機会が減る、遊べる場所が少ない、学校に適切な指導者がいないなどといった問題があります。そこでこのサイエンスカフェで自分の柔軟性や筋力をチェックし、体の特徴を知ることで障害予防のためのトレーニングや体づくりについて学びます。「子供が運動に触れる機会づくり」「専門知識を持つ指導者による安心感」「簡単なトレーニングを行うことで「スポーツ＝楽しい」を構築」という点で子供の体力低下といった課題を解決していきます。



### ③ よぞらボ ～夏に見える 星座のはなし～

光害などの問題により星が見えにくくなった今日。星座に想いを寄せ、夜空を見上げてみる機会を提供するためにこのサイエンスカフェを企画しました。主な内容は、その星座にまつわる神話についての話です。話の最後にゲストとの掛け合いや、軽くその星座について補足の説明などをしてもらいました。解説が終わると、ゲストからの光害の説明をしてもらいます。最後には質問コーナーなどを設け、学生とゲストがその質問について答えました。



## まとめ・今後について

どのチームも15人以上の集客に成功し、イベント内容も充実したものになりました。ただし、開催までの準備、講師側と連携した実施計画やフライヤーでの各方面への広報など、全て学生が企画・運営することは非常に苦勞を要します。特に、開催近日まで集客状況が芳しくなく、近くの施設や知り合いを頼ったりと、広報面が1番の難所でした。その他、急な計画の方向転換、それに準じて制作物を増やしたり、開催場所を変更したりと、大変なことはたくさんありました。改めて、計画性と柔軟な対応力が大切だと思いました。しかし、こういった中でも一番変わったのはチームワークの良さでした。一人一人が責任ある行動と仲間を思いやる心を大事にできたからこそ当日の成功がありました。皆はじめて立つ企画・運営の立場に困惑したものの、それならではの視点から苦勞を学び、参加者の視点にも立つことで、このチームもエンターテインメントを忘れない、参加者を楽しませるイベントになったと思います。この取り組みを通じて、人々の学びへの視野の拡大、新たな交流の場を形作っていくことができるのではないかと考えます。そして、専門家の方や地域の方々などを巻き込み、交流の場をデザインする力を身に付けるべく、私たちの学びも深めて行きたいと思っています。

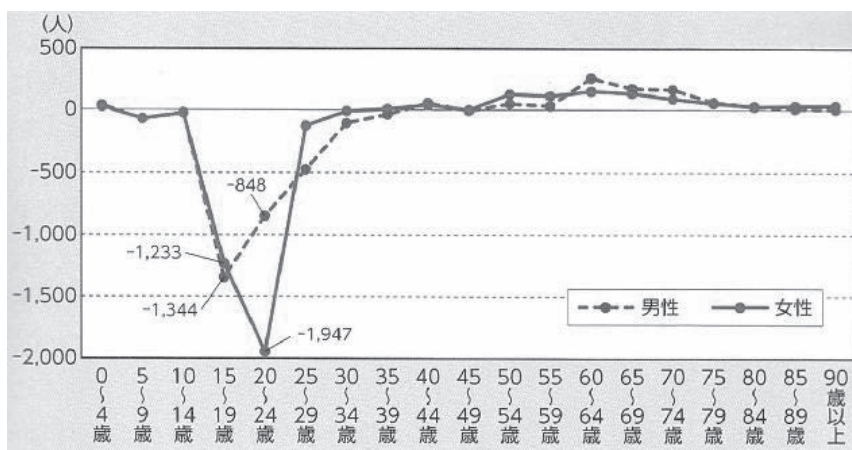
## “ゼロ”から始める静岡人生設計 ～by Life Plan Game～

所属：静岡活性隊 経営学部（浜松）鈴木章浩ゼミナール

戸澤大我（代表）、伊藤瞭、大城奏世花、笠原颯太、鈴木皓斗、田沢捷嗣、松島匠、宮田青空

### 1. 目的・概要

静岡県は、転出者数が転入者数を4,658人上回っており、全国ワースト8位である（2022年）。理由として地元でやりたい仕事・娯楽がなく、若者中心に東京や愛知などの都会がある地域に流出したと考えられる。特に、20～24歳の若者の流出が顕著である（図表1）。県の推計によれば今後、生産年齢人口が減少し若者の負担は増大する（図表2）。これらの課題・背景から、「意外と知られていない地元の魅力を知ってもらい、若者の県外流出を防ぎたい」という目的のもと、静岡・浜松をテーマにしたボードゲーム大会を開催し、観光・産業・仕事の3つの観点を基に、それぞれの魅力を中学生に発信していきたいと思い活動した。郷土愛を育み、将来県内で人生を送るライフプランをイメージできることを狙いとした。



図表1 静岡県における性別・年齢別社会増減(2021年) 出所：『静岡経済白書2023』p.13より転載

年次	15～64歳人口 (A)		65歳以上人口 (B)		A/B
	人口	構成比	人口	構成比	
2015年	2,192千人	59.3%	1,029千人	27.8%	2.1
2060年	1,243千人	50.1%	972千人	39.2%	1.3
増減数	△949千人	△9.2pt	△57千人	11.4pt	△0.8

出典：国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口(2018年3月推計)」、静岡県独自推計より作成

図表2 静岡県の生産年齢人口・高齢者人

出所：国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口(2018年3月推計)」、静岡県独自推計より作成



## 2. 事業内容・方法

ボードゲーム作成にあたり、2つの調査を行った。

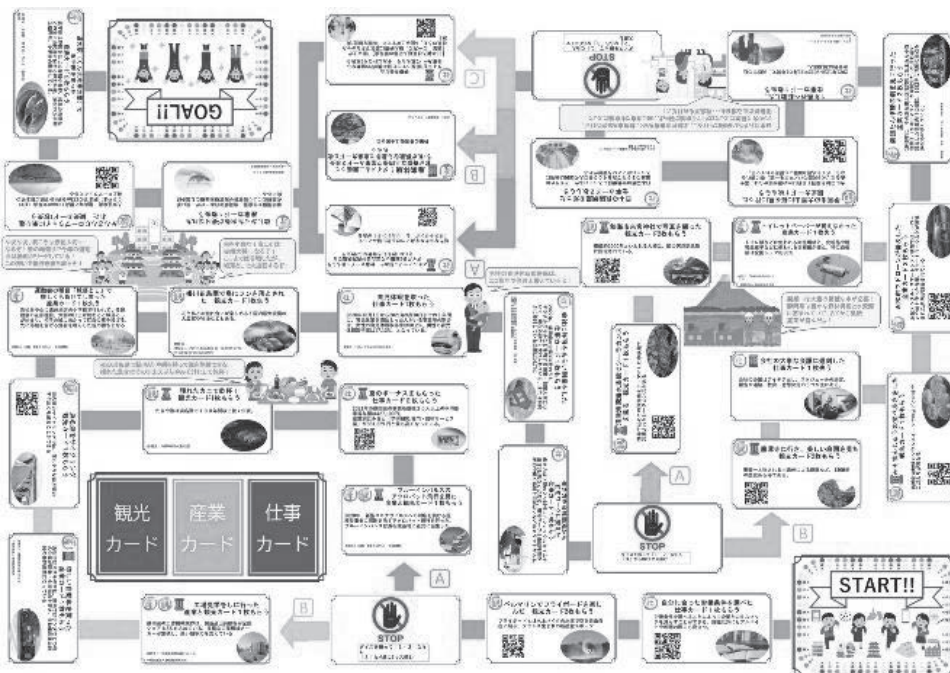
- ・文献調査 → 書籍やウェブサイトで地域が抱える問題点を洗い出す  
『静岡経済白書 2023』『浜松市推計人口表』『DX 推進に関する静岡県内企業の意識調査』  
「クイズ日本の社会保障」「浜松歴史のとびら」などの文献で、県内の産業、労働、魅力  
を調べてきた。
- ・聞き取り調査  
→ ・浜松市役所観光シティプロモーション課の方々へのインタビュー調査  
・トレフォイル社会保険労務士事務所へのインタビュー調査

文献調査と聞き取り調査をもとにボードゲームを制作し、2023年12月21日に常葉大学  
内で、2024年1月12日に都田中学校でイベントを開催した。



左写真：浜松市役所観光シティプロモーション課の方々へのインタビュー調査

右写真：トレフォイル社会保険労務士事務所でのインタビュー調査



図表3 ボードゲーム

図表4 ボードゲームのマス

### 3. 事業成果 当初の計画を100パーセント達成できた

都田中学校（対象学年：中学3年生）へ出張授業に赴き、ボードゲーム、〇×クイズを行った。中学生の反応はとても良くボードゲームを楽しんでいる様子であった。また、ボードゲームのマスに記載されているQRコードを、積極的にタブレット端末で読み取り、観光・産業・仕事に関する理解を深められる一助になれたと思う。〇×クイズにもチームで協力し、私たちが考えたイベントに前向きな姿勢で取り組んでくれた。都田中学校にはゲーム一式を寄贈し、いつでも遊んでもらえるようにした。

静岡活性隊の1年間の活動は中日新聞にも取り上げられた。



写真：学内でのボードゲーム大会の開催の様子      写真：都田中学校でのボードゲーム大会の開催の様子

#### <中学生の感想>

Aさん

これからは浜松の魅力をもっと知るためにいろいろなイベントに行ったり、今回知ったことを今後の生活で生かしたりしていきたいと思いました。

Bさん

QRコードを生かして、すぐに分かりやすい説明にアクセスできるようにしていて、この地域に関して、知らなかったことを知ることができ、説明までしてくれて、面白かったです。

Cさん

今後、どのようにしたら地域に貢献出来るか、どのようにして、地域に役に立つのか、考え直すことができました。自分も大人になったら、地域の役に立つ仕事につきたいと思いました。

都田中学校のブログで出張授業の盛り上がりの記事になった



24年1月26日付の中日新聞ネットニュースで活動内容が紹介された



### 4. 得られた学びと今後の展望

今回の活動では、静岡県観光情報や産業の強み、仕事についての知識など、私たちが知らなかった多くの学びを得ることができた。また、実際に私たちが作ったボードゲームやクイズで静岡県の魅力を伝える機会が減多にないため、中学生の反応や学ぶ姿勢を直接みることが出来たことは良い経験になった。これからは地元の課題点を発見し、知られざる魅力を中学生のみならず、多くの地域住民に発信させていきたい。従い、これらの活動を後輩へと引き継ぎ、活気が溢れる地元にするよう、次世代へと活動を広めていきたい。

## 目的・企画

2022年、静岡県は転出者数が転入者数を4,658人上回り、全国ワースト8位であった。特に20~24歳の若者の流出が顕著であり、流出を防ぐため郷土愛を育み、将来県内で人生を送るライフプランをイメージしてもらう機会を得ることが重要である。これらの背景から私たちは、「意外と知られていない地元の魅力を知ってもらうことで、若者の県外流出を防ぎたい」という目的のもと、静岡・浜松をテーマにしたボードゲーム大会を開催し、観光・産業・仕事の3つの観点を中心に、それぞれの魅力を中学生に発信していく企画をした。

## 取り組み内容

市役所への聞き取り調査の様子

**1. 事前調査** 質の高いゲームを設計するため、「文献調査」と「聞き取り調査」を行った。

### 【文献調査】

書籍やウェブサイトから、地域が抱える問題点を洗い出し、県内の産業、労働、魅力を調べた。  
『静岡県経済白書2023』『浜松 歴史のとびら』『浜松市推計人口表』等の文献を参考にした。

### 【聞き取り調査】

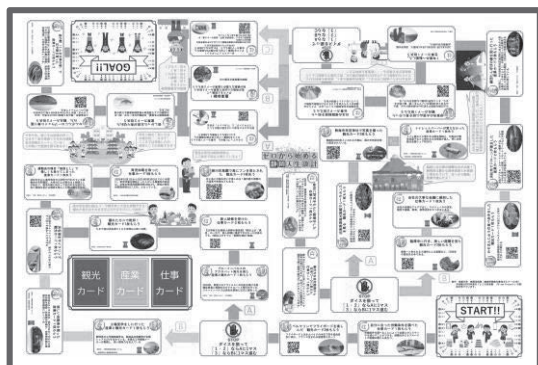
- ◆浜松市役所 観光・シティープロモーション課  
ニッチな観光名所、アクティビティなどを教えて頂いた。
- ◆トレフォイル社会保険労務士事務所  
就職先選びから退職後までの必要な知識を教えて頂いた。



**2. ボードゲーム、〇×ゲーム制作** 事前調査で得た知識を土台として観光・産業・仕事マスを作成した。

### 【ボードゲーム】

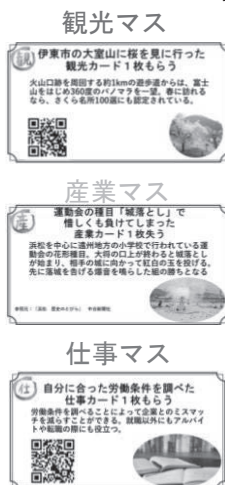
2~3人で1チームになり、3チームでチーム対抗戦で行う。すごろく形式で進み、マスの種類は観光・産業・仕事の3種類があり、その内容でカードが増減する。



観光・産業マスでは、静岡県の魅力に重点を置くことで、進路選択のヒントや静岡で働く意義を得てもらうことが狙った。仕事マスでは、静岡に関する知識にとどまらず、働くうえで押さえておくべき一般常識や制度まで扱った。

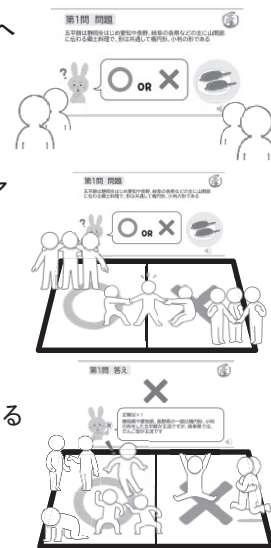
### 【〇×クイズ】

ボード内で登場したマスがクイズとして出題。正解するとカードが貰え、最終的にボードゲームで得たカードも含めた合計枚数で勝敗を競った。



QRコードは読み取ると、マスに関連したサイトに移動し知識をさらに深められる。

- 1 教室のモニターへクイズが表示
- 2 教室で〇×エリアをつくり、正解だと考える方へチームが移動
- 3 正解チームはカードがもらえる



**3. 都田中学校へ訪問** 2024年1月12日、中学校へ出張授業で赴き、ボードゲーム大会を開催した。

ボードゲームでは、マスに記載されたQRコードを積極的にタブレット端末で読み取っており、観光・産業・仕事の理解を深められる一助になれたと感じた。〇×クイズでは、チーム内で話し合うことでマスの内容を思い出しており、知識定着へ繋がられたと感じた。中学生の反応はとても良く、イベントを楽しんでいる様子であった。都田中学校にゲーム一式を寄贈し、いつでも遊んでもらえるようにした。



都田中学校でのボードゲーム大会の様子



### 中学生の感想



これからは浜松の魅力をもっと知るために、いろんなイベントに行ったり、今回知ったことを今後の生活で生かしたりしていきたいと思いました。

Aさん



今後、どのようにしたら地域に貢献出来るか、どのようにして、地域に役に立つのか、考え直すことができました。自分も大人になったら、地域の役に立つ仕事につきたいと思いました。

Bさん

## 得られた学びと今後の展望

私たち自身も初めて見聞きした静岡県の観光情報や産業の強み、仕事についての知識等多くの学びを得ることができた。今後は地元の課題点を発見し、知られざる魅力を中学生のみならず、多くの地域住民に発信させていきたい。従い、これらの活動を後輩へと引き継ぎ、活気が溢れる地元にするよう、次世代へと活動を広めていきたい。

## 弁当開発食育講座プロジェクト ～子どもたち、そして地域の未来へ～

所属：長芳ノ神

健康プロデュース学部 長島啓士（代表） 芳野琴那（会計） 神戸陽向

### 1. 目的・概要

栄養バランスの良い食事を摂取することは、私たちの身体や機能を正常に保ち、疾病を予防するために必要であるが、主食、主菜、副菜を適切に組み合わせた食事をしている人の割合は、全年代を通して低下しているのが現状である。近年、家庭の食事では、冷凍食品の利用や、弁当、惣菜などのテイクアウトやデリバリーなど、調理済食材や惣菜で手軽に済ます中食を利用する機会が増え、子どもたちが家庭での調理に触れる機会は少なくなっている。中食の増加が成長期の子どもたちに与える影響は大きいと推察され、生涯の健康を維持するためには、成長期の子どもたちに向けた「食に対する正しい理解」のための食育が必要であると考える。

本プロジェクトでは、株式会社ビッグ富士の協力を得て、野菜がたっぷり摂れるバランスの良い弁当を開発する過程から得た知見を基に、「栄養バランスのよい弁当の選び方と、学校の給食とを結び付けた食育講座」を企画、近隣の小学校5、6年生を対象として実践した。

### 2. 事業内容・方法

本事業は、浜松市に本社を構える株式会社ビッグ富士（以下ビッグ富士）で販売する弁当の開発と、小学生に対する食育講座という二つの要素を組み合わせ実施した。

#### 1) 弁当開発

##### ① 開発までの経緯

5月に静岡新聞社静岡放送（以下静岡放送）の仲介により、ビッグ富士との弁当開発プロジェクトを開始した。協力企業は、エスビー食品株式会社（以下S&B食品）とエスエスケイフーズ株式会社（SSKフーズ）の2社である。エブリィビックデー浜北店を訪問し、弁当作りの現場を視察し、売れ筋の弁当などの情報を得た。関係各社とミーティングを重ね、ビッグ富士からの女性の購買者を増やしたいという要望に沿って、一日の野菜摂取目標量350gの1/3が摂れる女性向きの弁当をテーマとした。S&B食品からカレー粉赤缶、SSK食品からドレッシングの提供を受け、弁当に取り入れることにした。試作は複数回実施した。12月、関係各社が出席し、開発した弁当の紹介を行った。その後、栄養価の調整を行い3種類の弁当レシピをビッグ富士に提出した。

## ② 弁当メニューの考案

初めに、女性の購買者が好む弁当について検討を行い、鶏むね肉、鯖、豚ロース肉を主菜の食材として選択した。彩りや調理方法を工夫し、一つの弁当に主菜 1 品、副菜 3~4 品、野菜 5~6 種類が入るように組み合わせた。目標エネルギー量を 600kcal 程度、一日の野菜摂取目標量 350g の 1/3 にあたる 120g 以上の野菜を取り入れるように設定した。課題であったカレー粉の辛みの強さについては、卵や粉チーズと合わせることで軽減し、オリーブオイルと岩塩のドレッシングは、その風味を生かし、シンプルに仕上げるように工夫した。また、店内で冷蔵棚での陳列販売ではないことを想定し、ミニトマトを除く全ての食材は加熱するよう配慮した。

## 2) 食育講座

### ① 食育講座実践までの経緯

7 月、近隣で縁のある都田小学校に、本プロジェクトの趣旨を伝え、2 月 1 日に 5、6 年生向けの食育講座を実施させていただけることになった。弁当開発と食育を結び付けるツールとして、「3・1・2 弁当箱法」を選択した。この方法は、“1 食に何を、どれだけ食べたらいいのか”を示すものさしになるもので、小学生にわかりやすい方法であると判断した。食育講座は小学校側に確認しながら計画を練り、12 月、児童の食の好みを事前アンケートにより調査し、その結果を活かした食育の流れを組み立てた。「3・1・2 弁当箱法」用の弁当箱で弁当を作り、普段給食で使っているプレートに盛り付けるなどの工夫を行い、具体的に学べる食育計画を作成した。

### ② 食育計画の立案と実践

初めに、小学生の興味を引くために、給食の人気メニューと好きな弁当の調査結果を提示した。肉系で濃い目の味付けのおかずを選択する児童が多く、野菜があまり好まれなかった。この結果から、まず、バランスの良い食事とは何かを問いかけ、次に「3 : 1 : 2 弁当箱法」では、主食・主菜・副菜を容積比率で 3 : 1 : 2 に詰めるだけで栄養バランスのよい弁当が作れることを市販の弁当を基に説明した。さらに、自分たちの作った模範となる弁当と給食のプレートに移したものを比較し、給食のように栄養バランスのよい食事が弁当でもできることを伝えた。事後アンケートを実施して食育講座の効果を調査した。



3:1:2 弁当箱法に沿った弁当①



①を給食プレートに移したもの



食育講座の様子

### 3. 事業成果

#### 1) 弁当開発

ビック富士の弁当開発を通じて、常温で販売されるものには生野菜が使えないことや、一つの弁当を作り上げるのには、おかずの味の組み合わせや一品ごとの盛付量等、配慮すべきことなど多くを学んだ。売れ筋弁当は、肉や揚げ物の占める割合が高く野菜が少なめのものが多かった。女性に好まれる弁当という要望に対し、栄養バランスがよく、野菜が多く、彩りが豊かで、主菜がしっかり摂れる弁当を目指し、3種類の弁当を完成させることができた。協賛メーカー提供食材のカレー粉は、カレーチーズチキン、豚肉のピカタ、カレーポテトに活用し、オリーブオイルと岩塩のドレッシングは、キャロットラペと彩り豆のサラダに用いた。ビック富士に提出したレシピは2月末の試食会にて評価され、3月末に店頭販売となる予定である。



カレーチーズチキン弁当

#### 2) 食育講座

事前アンケートの好きなおかず調査から、児童は肉系で濃い目の味付けのおかずを好み、野菜系のおかずは好まれない傾向がみられた。食べたい弁当調査でも同様に、から揚げ弁当やオムライス弁当など栄養に偏りがあると思われる弁当を好む傾向が強かった。この傾向はビック富士の視察でも感じたことだった。事前アンケート結果から、栄養バランスのよい弁当を学ぶためのツールとして選択した「3・1・2弁当箱法」は、児童が選んだ弁当を、主食の黄、主菜の赤、副菜の緑に色分けして、視覚的に栄養バランスを判断できるようにした。「3・1・2弁当箱法」のルールに従って詰めた弁当と給食プレートに移した写真を掲示したときは、児童から“給食と同じだ”という声を聴くことができ、弁当も給食のように栄養バランスのよいものにすることができると伝えることができた。事後アンケート結果では、バランスの良いお弁当を選択できた児童は97%となった。また、「次の弁当の日に自分で実践してみたい」などの意見も聞かれた。今回の食育講座で、普段の食事やお弁当への興味・関心を向上させるきっかけを与えることができた。

### 4. 今後の展開

本事業で私たちは、弁当の開発と児童への食育講座を実施することで多くのことを学んだ。今回の事業で得た経験と「食の正しい知識」伝えるため、これからも健康栄養学科における食と栄養に関する学びを深めたい。そして、さらにより分かりやすい食育講座ができるように努めていきたい。

# 弁当開発食育講座プロジェクト ～子どもたち、そして地域の未来へ～

長芳ノ神 長島啓士 神戸陽向 芳野琴那

## 【目的・概要】

栄養バランスの良い食事を摂取することは、私たちの身体や機能を正常に保ち、疾病を予防するために必要であるが、主食、主菜、副菜を適切に組み合わせた食事をしている人の割合は、全年代を通して低下しているのが現状である。

- ・冷凍食品、テイクアウトやデリバリーの利用機会が増え、子どもたちが家庭での調理に触れる機会は少なくなっている。
- ・生涯の健康を維持のため、成長期の子どもたちに「食に対する正しい理解」の食育が必要である。

野菜がたっぷり摂れるバランスの良い弁当を開発  
【株式会社ビッグ富士、S&B食品株式会社、SSKフーズ株式会社の協力】

「栄養バランスのよい弁当の選び方と、学校の給食とを結び付けた食育講座」を企画  
小学校5、6年生を対象として実践

## 【活動内容・結果】

### i 弁当開発

日程	実施内容
5月	静岡新聞社 静岡放送の仲介により、(株)ビッグ富士と弁当開発のプロジェクトを開始
8月	(株)ビッグ富士の要望と、協力企業からの指定商品を使ったレシピ開発に着手、試作実施
10月～11月	3種類の弁当メニューの組み合わせを検討
12月～1月	栄養バランスを整えたレシピを完成 メーカーとの交流会実施
2月	試作会（於：ビッグデイ浜北店）
3月～4月	店舗販売開始予定

### ii 食育講座

日程	実施内容
5月	都田小学校との連携を計画
7月	都田小学校長に計画の趣旨を説明し、協力を依頼。承諾を得た。
12月	事前アンケートを実施
1月	事前アンケートの集計講座準備
2月1日	食育講座の実施（対象：5、6年生、各45分授業） 事後アンケートを実施
2月	事後アンケート集計とまとめ

## 【今後の展望】

今回の事業で得た経験と「食の正しい知識」伝えるため、これからも健康栄養学科における食と栄養に関する学びを深めたい。そして、さらにより分かりやすい食育講座ができるように努めていきたい。

### ①開発までの経緯

＜協力企業の要望＞

- ・(株)ビッグ富士：女性の購買者を増やしたい。
- ・S&B食品(株)：カレー粉の辛みを抑えた工夫をしてほしい。
- ・SSKフーズ(株)：自社ドレッシングの使用をしてほしい。



### ②弁当メニューの考案

1食で1日に必要な野菜の1/3が摂取できる600kcal程度の彩りの良い弁当を3種類考案した。



### ③食育実践までの経緯

- ・都田小学校への協力依頼と相談
- ・事前アンケートの実施：生徒の食の好みを把握、授業計画の作成



### ④食育計画の立案と実践

#### ・3・1・2弁当法による食育講座

事前アンケートによる導入から、3：1：2弁当箱法を用いて、栄養バランスの良い食事について話をした。自分たちで作った3：1：2弁当を学校給食で使用しているプレートに盛り付け、身近に感じてもらった。栄養バランスの良い食事の選び方を伝えた。



#### ・事後アンケート実施

生徒の食に対する理解をクイズで確認した。また、栄養バランスの大切さが分かった、これからはバランスのよい食事を意識したい・実践してみたいなどの感想があった。



## 【まとめ】

弁当開発で学んだことを通し、バランスの良いお弁当の大切さを得て、小学生の普段の食事に対する興味を向上させるきっかけを作った。

# うなぎいもスイーツの開発プロジェクト

所属：TOKOFARM

健康プロデュース学部 青木絵夢（代表）、猪股七海、杉山莉穂、田島優波

## 1. 目的・概要

私たちの暮らす浜松では、加工の段階で廃棄される鰻の骨や頭を肥料にして育てられたさつまいもである「うなぎいも」が作られている。この肥料の特徴から、廃棄物の削減や環境負担の軽減に効果があると考えられる。私たちは、「うなぎいも」という地元食材を用いたスイーツを開発することで地産地消を促し地域活性化につなげ、またSDGsへの関心を高めることを目的として本プロジェクトを立ち上げた。うなぎいも協同組合ではこれまでに多くの「うなぎいも」のスイーツが商品化されてきたが、お弁当や仕出しに活用できるスイーツの開発は進んでいない。一方、有限会社竹泉は地産地消をモットーに地元の素材を生かしたお弁当作りをしているが、地元食材を活用した弁当のデザートメニューがないという悩みがある。

そこで私たちは、健康栄養学科で学んだ知識を活用し、有限会社竹泉とうなぎいも協同組合と共同して「うなぎいも」を用いた新しい商品を開発することを企画した。

## 2. 事業内容・方法

本プロジェクトでは、「うなぎいも」を使用した新しいスイーツを開発するため、以下の2つの開発計画を実施した。各企業・事業者が期待するスイーツの情報を得るため、話し合いの機会を持ち、互いの認識の共有、意見の交換を行った。さらに、私たち健康栄養学科学生が「うなぎいも」を使用した新しいスイーツを提案した。

- 有限会社竹泉と連携したお弁当用デザートの開発
- うなぎいも協同組合と連携した新しいスイーツの開発

### 1) 有限会社竹泉と連携したお弁当用デザートの開発

#### (1) 打合せ

2023年8月8日、お弁当に入れるための条件や開発上のポイントについての情報交換を行った。要望として、以下のものが挙げられた。

お弁当に入れられる一口サイズの地元食材を使ったデザート、ターゲットは主婦層をメインにする、作業工程が少ないもの、単価は1つ20円程度。

#### (2) 「うなぎいも」スイーツの試作とアンケート調査

「うなぎいも」を使ったスイーツは、定番の和菓子である芋羊羹、台湾のお菓子であるダンファンソー（パイ風の生地を使った焼き菓子）とディーグアチョウ（手軽に食べることができる揚げ菓子）、人気食材であるチーズを組合せたチーズケーキの4種類（写真1）を試作



し、2023年9月24日（イオンモール浜松志都呂店）に行われた大学生交流フェスタにて、一般来場者69名を対象にアンケート調査を実施した。4種類の試作品（写真1）を提示し、食べてみたいスイーツ1種類を選んでもらった。終了後、データの集計と結果の分析をした。有限会社竹泉の要望を満たすお弁当用デザートに向いているスイーツの検討を行った。

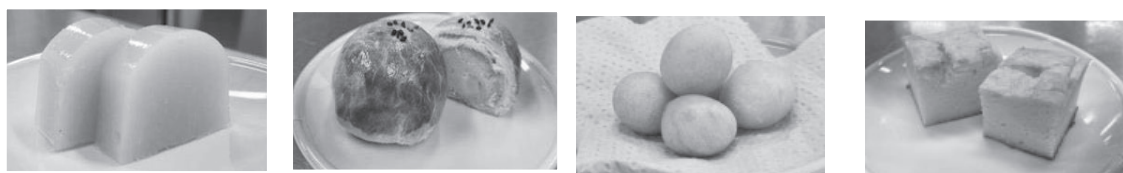


写真1 左から芋羊羹、ダンファンソー、ディーグアチョウ、チーズケーキ

### (3) 新しいお弁当用デザートレシピの提案

2023年11月4日、常葉大学浜松キャンパスで行われたキトルス祭において、「うなぎいも」と果物を合わせたスイーツレシピ考案のために一般来場者38名を対象に試食とアンケート調査を実施した。「うなぎいも」ペーストにそれぞれ、りんご、柿、みかんの3種のペーストを合わせたものを試食してもらい、その結果をデザート開発に生かした。アンケートの結果を踏まえて「うなぎいも」と果物の二層の芋羊羹を完成させ、2023年12月13日に試作品4種を提出し、有限会社竹泉社長と意見交換を行った。

### 2) うなぎいも協同組合と連携した新しいスイーツの開発

2023年9月8日、生産者の立場から「うなぎいも」の商品開発に対する要望などを聞く機会となった。また、「うなぎいも」加工やうなぎいもショップで販売されている商品の製造現場を見学することができた。「うなぎいも」の味をしっかりと感じられるスイーツで、多くの人の手にとってもらいやすいように、味の想像ができるものという要望があった。「うなぎいも」を使用した新しいスイーツの開発を目指した。

### 3) 地域貢献活動

より多くの方に地元食材「うなぎいも」への興味と地産地消を促し、SDGsへの関心を高めるために、2023年11月11日磐田市アミューズ豊田で開催された産業振興フェア in いわたに出展した。そこは未来塾の中間発表ポスターの掲示を行い、これまでの活動内容についての紹介やプロジェクトの説明を行った。

## 3. 事業成果

### 1) 有限会社竹泉と連携したお弁当用デザートの開発

大学交流フェスタでは、私たちが考えた「うなぎいも」を使ったスイーツ試作品は、ダンファンソー29名、ディーグアチョウ17名、チーズケーキ16名、芋羊羹7名という順に人気があった。また、どのスイーツもおいしそう、食べたいという意見であった。有限会

社竹泉社長と話し合い、作り方がシンプル、お弁当に入れる1口サイズにできるなどの要望を生かせる芋羊羹にオリジナルアイデアを加えたデザート開発を目指した。そこで、芋羊羹と地元果物を合わせることで商品のオリジナル性と地元食材の活用ができると考え、キトルス祭において、「うなぎいも」に合う果物についてのアンケートを実施した結果、りんご16名と人気が高く、次いで柿13名、みかん7名であった。このアンケートを参考に「うなぎいも」とりんごを組み合わせたオリジナルデザートとして、「うなぎいも」羊羹の上りんごのペーストを寒天で固めた甘酸っぱい味を組み合わせた二層芋羊羹をレシピ考案し、提案した。その結果、有限会社竹泉では現在、春夏秋冬に合わせたお弁当を作る「はなまる弁当」の企画を行っている。今回のプロジェクトで開発した「うなぎいも」の二層芋羊羹を、今秋販売予定のデザートとして採用が決定された（写真1）。

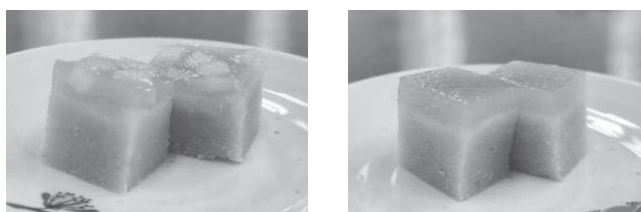


写真2 二層芋羊羹（左からりんごの粒あり寒天、りんごの粒なし寒天）

## 2) 地元食材を使用したスイーツ開発による地域活性化

本プロジェクトを通して、大学生交流フェスタ、キトルス祭などのイベントでは、ポスター掲示や試食を行い、「うなぎいも」という地元食材を多くの人に知ってもらう機会となった。これにより地産地消やSDGsへの関心を高めることができたと期待される。

今回の活動で、どんな販売方法をするかによって求められるスイーツの条件が違い、ニーズに合致したものを作る大切さを製造者目線で学ぶことができた。そしてスムーズなプロジェクトの進行には報告・連絡・相談が欠かすことができないという学びがあり、私たちの今後の課題ともなった。

## 4. 今後の展開

有限会社竹泉との連携したお弁当用デザート開発は今後も新しい商品の提案を行い、取り組んでいきたいと考えている。一方、うなぎいも協同組合と連携している新しいスイーツ開発は現在も進行中であり、焼き菓子を中心とした商品の提案をする予定である。

本プロジェクトを実施することにより、周りの人と協力して商品開発する楽しさや難しさを学んだ。また、「うなぎいも」という地元食材をきっかけに多くの人に地産地消やSDGsへの関心を高めることが実感できた。今後は、さらなる地域活性化につながる活動を継続していきたいと考えている。

## プロジェクトの目的・方法

より多くの方に地元食材へ興味を持ってもらい、地産地消を促しSDGsへの関心を高める

- ①お弁当用デザート開発：「有限会社竹泉」との連携
- ②新しいスイーツ開発：「うなぎも協同組合」との連携

地元食材として、うなぎの廃棄部分が肥料として使われている「うなぎも」を使用したスイーツの開発・試作を行う。開発したスイーツは連携する企業・事業主に提案を行い、販売を目指す。

イベントへの参加ではうなぎもに関する展示などを行い、来場者にうなぎもへ興味を持ってもらう。また、アンケートの実施をして開発の参考とする。

### 「うなぎも」とは？

加工の段階で廃棄されてしまうウナギの骨や頭を利用した肥料を使って育てられたさつまいも。

廃棄物の削減や環境負担の軽減に効果があり、SDGsへ繋がることが期待される。

## 結果

### お菓子開発に向けて連携先企業の要望

#### 【有限会社竹泉】

一口サイズの地元食材を使ったデザート。作り方がシンプルであり、「うなぎも」の味を生かすことが出来るお菓子が望ましい。

スイーツの試作

#### 【うなぎも協同組合】

「うなぎも」の味をしっかりと感じられるスイーツ。多くの人の手に取ってもらいやすいよう、味の想像ができるものが望ましい。

### 試作品アンケート調査の実施

#### 【大学生交流フェスタ】

表1.交流フェスタ アンケート結果

実施内容：試作した4種類のスイーツ（下の写真）を見て食べたいと思ったものを一つ選んでもらい、集計を行った。「うなぎも」ポスター展示を行った。  
回答：一般来場者69名

	得票数
ダンファンソー	29
ディーグアチョウ	17
チーズケーキ	16
芋羊羹	7



### お弁当用デザート開発【有限会社竹泉】

有限会社竹泉と協議の結果、要望を生かせる芋羊羹に地元果物を合わせたデザートの試作と開発を目指す

#### アンケート調査<キトルス祭>

実施内容：芋と3種類の果物ペーストを合わせたデザートを試食後、最も美味しいと感じた果物を1つ選んでもらった。

回答：一般来場者38名

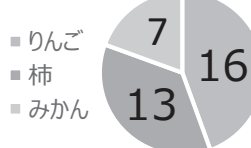


図1 キトルス祭 アンケート結果

#### お弁当用デザートの提案

アンケート調査をもとに芋羊羹とりんご寒天を組み合わせた、二層芋羊羹を提案（下の写真）。



りんご粒入り寒天



りんご粒なし寒天

### 新しいスイーツ開発【うなぎも協同組合】

試作・アンケート調査を実施したダンファンソー、チーズケーキなどの焼き菓子をメインとしたスイーツ開発を現在行っている。

#### プロジェクトに関する広報活動

大学生交流フェスタや地域のイベントへの参加時に、ポスターを用いて来場者へ「うなぎも」や本プロジェクトの説明を行った。多くの人との交流を通して、「うなぎも」から地元産品とSDGsへの関心を高める機会となった。

### 今後の展開

有限会社竹泉との連携したお弁当用デザート開発は今後も新しい商品の提案を行い、取り組んでいきたいと考えている。一方、うなぎも協同組合と連携している新しいスイーツ開発は現在も進行中であり、焼き菓子を中心とした商品の提案をする予定である。

本プロジェクトを実施することにより、周りの人と協力して商品開発する楽しさや難しさを学んだ。また、「うなぎも」という地元食材をきっかけに多くの人に地産地消やSDGsへの関心を高めることが実感できた。今後は、さらなる地域活性化につながる活動を継続していきたいと考えている。

今秋販売予定の有限会社竹泉「はなまる弁当」のデザートとして採用が決定

## まるごとあそぶ・まなぶ防災プロジェクト

所属：ThunderBirds

代表 今田悠月

### 1. 本プロジェクトの目的・概要

東日本大震災から12年が経過し、人々の記憶と関心は薄れつつあることと、そもそもこの震災を知らない子どもたちが増えていることに私たちは問題意識を持った。また、私たちは、被災地の方の「震災の記憶を忘れて欲しくない」「あんなことは2度と起きて欲しくない」という言葉を聞いた。その思いを受け、本プロジェクトでは、震災の記憶や経験を後の世代に紡いでいくこと、南海トラフ巨大地震や土砂災害など、今後地元地域で起こりえる災害に対して子どもたちが強い関心を持ち、防災活動を行ってもらうことを目的とし、年間を通じた防災に関する活動をおこなった。

その過程で、まずは私たちが災害の実態を知らなければならぬと考え、繋がりのある福島県いわき市に赴き、被災された方々のお話を聞くことや、被災された農家さんの高齢化による課題となっている農作物収穫の支援活動を行うことで、被災地の現状と「災害時に自らの命を守る方法」を学び、その後の活動につなげていった。

具体的な活動としては、小学生対象のワークショップ「まなぼうさい」の実施、福島県いわき市での支援活動と宮城県石巻市での被災地視察、キトルス祭でのいわきの農家の商品を使ったレシピ開発と販売、レシピブックの作成に加え、2024年1月1日に発生した能登半島地震に対する支援募金活動もおこなった。

### 2. 事業内容・方法

#### ①たのしくまなぼうさい

小学生を対象とした防災学習活動「たのしくまなぼうさい」では、防災ホイッスルワークショップと防災食アルファ化米を使用したおにぎりづくり体験を行った。防災ホイッスルとは、防災・防犯の観点から自らが助けを求める際に大きな音を出すために考えられたものである。実際の活動では、どのような場面で使用するのか具体例を持ち出しながら説明し、その後ワークショップを行うことで子どもたちの学びとなるような活動とした。アルファ化米とは、水やお湯のみで作ることの出来る米であり、防災食として使用されるものである。実際の活動では、アルファ化米の作り方を説明し、実食することで味を覚えてもらい防災食に関する関心を高めるような活動とした。活動後にはアンケートを行い、子どもたちにとって楽しく学べる活動となっているのかを判断する基準とした。

#### ②福島県いわき市被災地支援活動、宮城県石巻市被災地視察

2019年台風19号で被害に遭われた福島県いわき市の2軒の農家を対象に、農作物の収穫準備や収穫などの支援活動を行った。この活動は、2020年、2021年にも行われている

活動であり、継続支援活動として日本財団ボランティアセンター連携のもと行われた。宮城県石巻市の被災地視察では、石巻南浜津波復興祈念公園、石巻市震災遺構門脇小学校を訪れ、「命のかたりべ」高橋匡美さんとアイリンブループロジェクト菅原淳一さんから東日本大震災当時の状況のお話を伺い、参加した大学生が災害に対する理解を深め、防災意識を向上させる活動を行った。

### ③いわきの農家さんの商品を使ったレシピ開発、販売

福島県いわき市での活動でご協力いただいた農家さんの商品を使用しレシピを開発、キトルス祭にて販売を行った。また、農家さんの商品紹介や販売しているメニューのレシピが記載されているハンドブックを作成し、販売する際に配布をした。

### ④令和6年能登半島地震に対する支援募金活動

令和6年1月1日に発生した能登半島地震に対する支援募金活動を、1月13日（土）、14日（日）の2日間に渡り浜松駅付近で行った。

## 3. 事業成果

### ①たのしくまなぼうさい

防災ホイッスルワークショップとアルファ化米でのおにぎりづくりを通じて、参加者に防災をより身近に感じてもらうことができた。ワークショップ後に行ったアンケートでは、「この活動が楽しかったか?」「防災について学ぶことができたか?」という2つの質問を行い、どちらの項目でもほぼすべての参加者が「YES」と回答していた。子ども向けの内容で行われた「たのしくまなぼうさい」であるが、参加した子どもの保護者からも「こんな防災食があることを知らなかった」という感想をいただき、年齢を問わず様々な参加者の防災意識を高めることができたと考えている。

また、運営に参加した学生からは、「子どもとふれあうことでやりがいを感じた」「子供ができたと喜んでる姿を見て嬉しかった」という、子どもと関わることの楽しさについてのコメントが多かった。また、「参加者とのコミュニケーションが難しかった」「防災ホイッスルについての説明をもっとわかりやすくした方がよかった」など、反省点や改善点などもあがっていた。



### ②福島県いわき市被災地支援活動、宮城県石巻市被災地視察

福島県いわき市で行った農家に対しての支援活動では、農家から「このような活動を継

続して行ってきてくれてありがたい」「支援活動としてだけでなく、SDGs と絡めてさらに活動を展開していきたい」というコメントをいただいた。また、別の農家からは「学生たちが主体的にこの活動を行うことで、災害を自分事だと認識し、被災者に対する共感力を高めることで、防災につなげて行けると思う」というコメントをいただいた。また、令和5年台風13号によって発生した水害被害に対する支援活動も行うことができた。

宮城県石巻市で行った被災地視察では、石巻南浜津波復興記念公園と石巻市震災遺構門脇小学校を訪問した。現地では、津波と津波火災の傷跡を残す門脇小学校を見学し、さらに津波で故郷を失った高橋さん、アイリンブループロジェクトの代表理事である菅原さんのお話を伺った。参加学生たちの感想からは、「石巻の方々を感じた恐怖を、私たちは数年後に味わうかもしれない」「ここから私たちはどのように行動すべきなのか考えなくてはいけない」という、災害を自分事として捉え、自らが住んでいる地域でも同じような災害が起ころうとしている今、自分たちができることは無いか探そうという意識が芽生えていることが読み取れた。

### ③いわきの農家の商品を使ったレシピ開発、販売

フェイジョアのジャムを使用したドーナツとオリーブパスタのミートソースパスタを販売した。ドーナツは約70個が完売することができ、オリーブパスタも好評であった。ハンドブックを手にとった人からは、「どのような活動をしてきたのか」「他にはどのような食べ方があるのか」などの質問があり、私たちの活動や農家さんの商品に対し関心を持ってくれた様子であることが分かった。

### ④令和6年能登半島地震に対する支援募金活動

1月13日、14日の2日間の募金活動で235,315円の義援金を待詰めることができた。活動中には市民の方々から「ありがとう」「頑張って」という声掛けをいただき、市民の方々から「何らかの形で力になりたい」という気持ちが伝わってきた。



## 4. 今後の展望

今後の活動では、東北地方での被災地支援活動、被災地視察で学んだことを「まなぼうさい」に活かし、自らの学びを地元地域へ還元していけるよう活動内容を考案していく。また、災害情報の収集を積極的に行い、大規模な災害が発生した際にはすぐに支援募金活動を行うことができる体制づくりをしていく。



常葉大学  
TOKOHU UNIV

# まるごとあそぶ・まなぶ防災プロジェクト

Thunder Birds

代表 今田悠月



## 課題・目的

東日本大震災から12年が経過し、人々の記憶と関心は薄れつつある。また、そもそもこの震災を知らない子供たちも増えている。私たちは、被災地の方の「震災の記憶を忘れて欲しくない」「あんなことは二度と起きて欲しくない」という言葉を聞いた。その思い受け、本プロジェクトでは、震災の記憶や経験を後の世代に紡いでいきたい。南海トラフ巨大地震や土砂災害など、今後地元地域で起こりえる災害に対して子供たちが強い関心を持ち、防災活動を行ってもらうために、年間を通じた防災に関する活動を行う。

## 取組内容

### 1. 『たのしくまなぼうさい』

災害時・緊急時等に、声の代わりに大きな音を立てて救助を求めるための防災ホイッスルを作成する「防災ホイッスルづくりワークショップ」や、災害時において火を使わずに食べることができるアルファ化米の作り方、紙食器づくりの体験活動「アルファ化米ってなあに？」を実施した。

### 2. 『福島県いわき市被災地支援活動・宮城県石巻市被災地視察』

福島県いわき市にて、令和元年台風19号において被災された農家に赴き、農作業支援活動を行った。また、令和5年台風13号で被災したいわき市の災害支援活動をおこなった。宮城県石巻市では、石巻南浜津波復興祈念公園や石巻市震災遺構門脇小学校などで被災地視察を行った。(アインブループロジェクト、「命の語り部」)

### 3. 『キトルス祭』

福島県いわき市被災地支援活動において協力していただいた農家さんのPR活動のため、その農家さんの商品でオリジナルメニューを作成し販売した。また、販売されているメニューのレシピや農家さんの紹介を記載したハンドブックを作成し配布した。

### 4. 『令和6年能登半島地震 支援募金活動』

令和6年1月1日に発生した能登半島地震に対する支援のため、1月13日、14日の2日間にわたり浜松駅付近で募金活動を行った。

## 事業成果

### 1. 『たのしくまなぼうさい』

防災ホイッスルワークショップとアルファ化米でのおにぎりづくりを通して、参加者に防災をより身近に感じてもらうことができた。参加した子供のみならずその保護者からも「こんな防災食があることを知らなかった」という感想をいただき、年齢を問わず様々な参加者の防災意識を高めることができたと考ええる。

### 2. 『福島県いわき市被災地支援活動・宮城県石巻市被災地視察』

福島県いわき市と宮城県石巻市を訪問し、被災地支援活動と被災地視察を行った参加学生からは、「石巻の方々を感じた恐怖を、私達は数年後に味わうかもしれない」「ここから私たちはどのように行動すべきなのか考えなくてはいけない」と災害を自分事として捉え、今自分たちができることは無いか探そうという意識が芽生えていることが読みとれた。

### 3. 『キトルス祭』

フェイジョアのジャムを使用したドーナツは完売することができた。また、ハンドブックを見て、いわきの農家さんのフェイジョアやオリーブに興味を持ってくれた方が多く、「どのような味なのか」「どのような食べ方がほかにあるのか」などたくさん質問をいただいた。

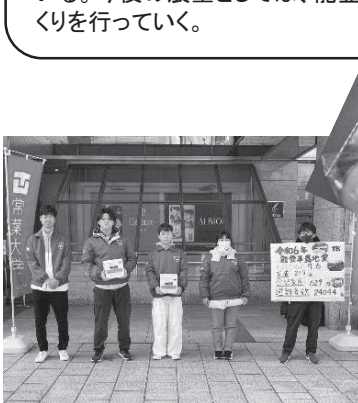
### 4. 『令和6年能登半島地震 支援募金活動』

令和6年1月1日に発生した能登半島地震に対する支援のため、1月13日、14日の2日間にわたり浜松駅付近で募金活動を行い、2日間で回収した支援金の合計金額は〇〇円となった。

## 今後の展望

キトルス祭で行った飲食物の出店が現体制における初めての試みであったため、商品の仕入れの段取りが悪かったことや妥当な価格設定ができなかったことなど、反省点が多い結果となった。今後もいわき市の農家さんとの交流を続け、よりよく商品の魅力を浜松に伝えられるようにするために、今回の反省点を生かして事業計画を作成しようと考えている。

令和6年能登半島地震に対する支援募金活動では、大学生ならではの瞬発力を活かすすぐに募金活動を行うことができたと考えている。今後の展望としては、能登半島地震に対する支援活動の継続と、同じような災害があった際にすぐに支援活動が行える体制づくりを行っていく。



令和6年能登半島地震  
支援募金活動



フェイジョアドーナツ/  
オリーブパスタ販売



津波遺構門脇小学校



たのしくまなぼうさい

## 足を速くする秘密を大公開スペシャル

所属：RED

健康プロデュース学部：田中稜真（代表）

鈴木愛矢、山崎優太郎、辻創太、袴田更紗、山内洋人

### 1. 目的・概要

平成30年にスポーツ庁が部活動の在り方に関する総合的なガイドラインを策定した。その背景としては現在の小中学校の教員の時間外労働が問題になっていることに加え、各部活動の専門知識を持った教員が不足していることがあげられる。令和3年度の学校運動部活動指導者の実態に関する調査報告書によると生徒を指導するうえで競技経験がないと回答した教員は30%とあり、未経験の教員が部活動を指導している現状である。

私たちはこれまでも大学近くの小学校などで、専門的な指導をして欲しいと依頼を受け、走り方の指導をした経験がある。実際に指導を行い、児童の生の声を聴くと、「いつもよりわかりやすかった」「速く走れて楽しい」といった声を聴くことができ、指導に対する手ごたえを感じることができた。今後、部活動が地域に移行され、それにより競技をする環境がなくなる児童が出ることも想定される。

今回、私たちはこれまでの部活動で培った経験と学科で学んだ知識を活用し、走り方を基本とし小冊子を作成し、地域の児童・生徒が陸上競技に親しみ、競技力が向上することに貢献することを目的とする。

### 2. 事業内容・方法

本事業では、以下の事業を実施した。

#### 1) 7月トレーニングメニューの考案

①神経系のトレーニング、②走りの原則、③専門的な動きづくりの3つのテーマでトレーニングメニューを考案し、6か所で実践した。

#### 2) 実践活動

##### ①舞阪陸上教室 足を速くする教室

7月29日に実施した舞阪陸上教室では、最初に鬼ごっこを行い、その後、カラーコーンを用いて、カラーに合わせた動作を行う神経系トレーニングを導入し、神経から筋肉への伝達スピードを高める練習を行った。学生は、参加した児童一人ひとりに目を配りサポートと言う形練習に取り組んだ。

→小学生ができることとできないことを自分たちが理解をし、その結果に応じて指導方法を検討し、改善したものを陸上教室で取り入れる。





### ②都田小学校 部活動支援

9月に実施した都田小部活動支援では、小学生5・6年生を対象に腕振り、姿勢、腿上げなどの基本動作の説明の後、変形ダッシュ等のレクリエーションを取り入れながら、低い姿勢でのスタートを意識させる練習を行った。



### ③アスラスポーツ陸上教室

9月2日に実施したアスラスポーツ対象の陸上教室では、改善したトレーニングメニューを実施し、50m走の記録の測定、疾走動作の撮影を行い、トレーニングを継続して行ってもらい、1ヶ月後再度測定をし、トレーニングを行うことで、記録や疾走動作がどのように変化するかを見た。10月2日アスラスポーツを対象に再度測定を行った。

### ④大学生交流フェスタ

大学生交流フェスタでは、イオンモール志都呂店でランニングクリニックを実施した。クイズ形式で走りの基本を説明した。

### ⑤健康・スポーツフェス

11月4日のスポーツフェスでは、走る、跳ぶ、投げるの3つを実施し、小学生の運動能力向上、新体力テストの50m走、ボール投げ、立ち幅跳びの点数向上を目的として行った。それぞれのコツやポイントを説明、実践を行い、最後には全体でリレーを行い、参加者、大学生関係なく楽しく実施することができた。

### ⑥赤佐小学校 KARADA づくりクラブ

2月1日の赤佐小学校（KARADA づくり）では、走りの基本動作だけでなく、ミニハードルやマークなどの道具を使用し、陸上競技の専門的動作を多く取り入れることで競技力向上が期待された。

### 3)「速く走るための参考書」冊子の作成

走りの基本的な動作の説明やトレーニング方法の紹介をし、冊子を補助として使用することで小中学生の運動能力向上が期待できる。浜松市内小中学校に配布する予定。



### 3. 事業成果

陸上教室を開催することによって、地域の小学生たちが陸上競技に親しみ、楽しむ機会を提供することができた。アスラスポーツ陸上教室では、50m の測定と疾走動作の変容を記録した。トレーニングと動きの指導を行った結果、50m 走のタイムを 0.5～1.0 秒程度縮めることができた児童もいた。また、陸上教室の最初と最後の動作では、腕振りが横から縦になり、走る際の遊脚側の膝が高くなる、低い姿勢を保ちスタートダッシュができるなど具体的な変化が見られた。

①舞阪陸上教室及び⑤健康スポーツフェスにおけるアンケート調査の結果では、感想として「とても楽しかった」「楽しかった」が 98% (図 1)、足が速くなったと「とても感じた」「感じた」が 96% (図 2) と高い評価であった。

陸上教室の開催により、地域の児童が陸上競技に触れる機会を提供し、運動能力や競技力向上が期待できる事業となった。

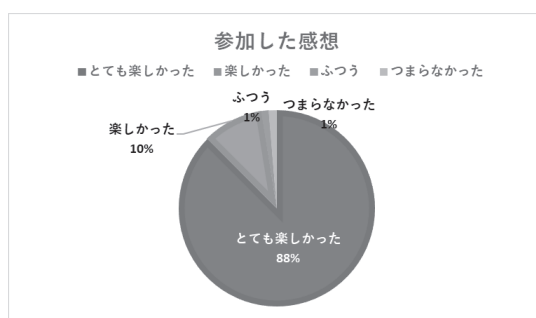


図 1 参加した感想

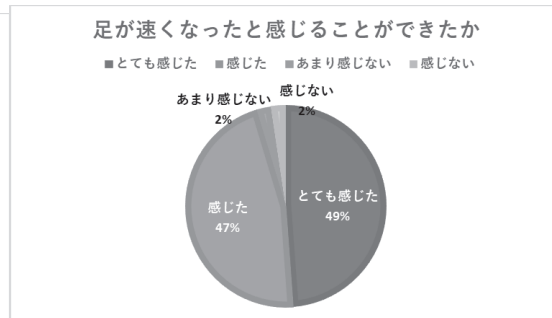


図 2 : 足が速くなったと感じることができたか

### 4. 今後の展開

冊子を 2 月に実践を行った赤佐小学校で配布したが、今後は、浜松市内小中学校に随時配布する。また、このような活動を陸上競技部の後輩たちへ伝え、今後も陸上教室を継続実施していきたい。さらに、作成した冊子を陸上教室で活用することで、専門知識を持たない教員の補助となり、児童の運動能力向上に貢献していきたい。



常葉大学  
TOKOHA UNIV.

# 足を速くする秘密を大公開スペシャル

常葉大学 RED

田中 稜真 鈴木 愛矢 山崎 優太郎 辻 創太 山内 洋斗 袴田 更紗

## 目的・概要

目的:地域の児童生徒が陸上競技に親しみ、競技力向上に貢献する。

現在の小中学校の教員の時間外労働が問題になっていることに加え、各部活動の専門知識を持った教員が不足している。生徒を指導する上で、競技経験がないと回答した教員は30%であり、未経験の教員が指導していることが現状である。

今後、部活動が地域に移行され、それにより競技をする環境がなくなる児童生徒が出ることも想定される。

これまでの部活動で培った経験と学科で学んだ知識を活用し、走り方を基本とした小冊子を作成し、地域の児童生徒が陸上競技に親しみ、競技力向上に貢献することを目的とする。

## 事業内容・方法

### 1) トレーニングメニューの考案

①神経系のトレーニング、②走りの原則、③専門的な動きづくりの3つのテーマでトレーニングメニューを考案し、6か所で実践した。

### 2) 実践活動

#### ①足を速くする教室

日時:7月29日 10時~11時30分  
対象:小学生1年~6年  
連携先:(公益)浜松市スポーツ協会



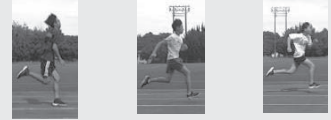
#### ②部活動支援

日時:9月の7日間 13時~14時  
対象:小学生4年~6年  
連携先:浜松市立都田小学校



#### ③陸上教室

日時:9月2日、10月24日  
14時~15時30分  
対象:小学生4年~6年  
連携先:アスラスポーツ



#### ④ランニングクリニック

日時:9月24日 2回11時~、14時~  
対象:イオンモール浜松志都呂来客者  
連携先:浜松市内大学地域貢献ネットワーク



#### ⑤「走る」「跳ぶ」「投げる」 陸上教室

日時:11月5日 13時30分~15時  
対象:浜松市内小学生  
連携先:常葉大学 地域貢献センター HUVOC



#### ⑥陸上(KARADづくり)

日時:2月1日 13時30分~15時10分  
対象:小学生4年~6年  
連携先:浜松市立赤佐小学校



### 3) 「速く走るための参考書」 冊子作成

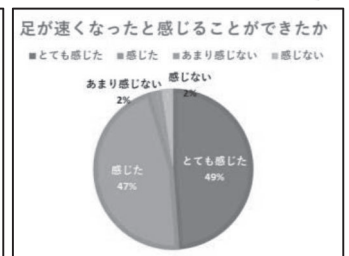
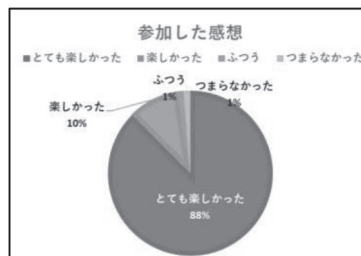
内容:走りの基本的な動作の説明やトレーニング方法の紹介する。  
効果:冊子を補助として使用することで小中学生の運動能力向上が期待できる。

対象:浜松市内小中学校 配布 300部



## 事業成果・結果報告

陸上教室により、タイムや動作に具体的な変化が見られた。①舞阪陸上教室及び⑤健康スポーツフェスにおけるアンケート調査の結果では、感想として「とても楽しかった」「楽しかった」が98%(図1)、足が速くなったと「とても感じた」「感じた」が96%(図2)と高い評価であった。陸上教室の開催により、地域の児童が陸上競技に触れる機会を提供し、運動能力や競技力向上が期待できる事業となった。



## 今後の展開

冊子を2月に実践を行った赤佐小学校で配布したが、今後は、浜松市内小中学校に随時配布する。また、このような活動を陸上競技部の後輩たちへ伝え、今後も陸上教室を継続実施していきたい。さらに、作成した冊子を陸上教室で活用することで、専門知識を持たない教員の補助となり、児童の運動能力向上に貢献していきたい。



## 地域連携×スポーツで地域活性プロジェクト

所属：ふれぐろラボ

代表 栗野貢成、袴田更紗、袴田歩夢、岡田羽菜、海野千尋、飯室耕成、名倉芽依、川島捺希、貫結女香、外山児菜、松永将広、鳥居元気、佐藤直樹、中島彪也、石川遼、土井颯馬、鈴木拓真、金大海

### 1. 目的・概要

ふれぐろラボでは、子どもたちの体力や運動能力低下問題の改善のために、学内外のイベント参加や、子どもたちの健康増進につながる活動を小学校などで行ってきた。子どもたちを取り巻く遊びや運動環境に大きな改善はないため、引き続き、これまでの活動を発展的に実施する。また、子どもの親世代の運動不足も問題視されているため、今年度は特に、より多くの大人も一緒に楽しめる機会を増やすことも目的にし、体を動かすことや、子どもとの運動機会を持つことの楽しさを感じ、継続してもらうための企画を考え、実施した。

### 2. 事業内容・方法

本事業では以下の4つの企画・イベントを実施した。

- ① Kids Open Campus 場所：常葉大学真和体育館  
内容：小学生を対象に、「走・投・跳・蹴」などの基本動作のポイントを指導し、今後のスポーツ活動を楽しんでもらうきっかけを作る。
- ② 大学生交流フェス 場所：イオンモール志都呂  
内容：親子を対象とした、運動体験ブースの企画、運営。親子で運動の楽しさを知ってもらい、その後も継続するきっかけを作る。また、他大学の学生と協力し、「SDGs 未来都市浜松」を目指せるような活動を行う。
- ③ 健康スポーツフェス 場所：常葉大学柔道場  
内容：親子で行う運動教室の企画、運営を行い、家で一緒に楽しくできる運動を紹介する。
- ④ まちなかスポーツフェス 場所：ソラモ  
内容：まちなかスポーツフェスティバル実行委員会とともに、駅前の人通りの多い場所で、アスリートによる夢のパフォーマンス披露を行い、スポーツの普及や浜松市の活性化につながる企画を行う。ふれぐろラボではアジリティトレーニングを実施。

#### 〈地域との連携〉

- ・大学生交流フェスタでは常葉大学地域貢献課だけでなく、浜松市大学地域貢献ネットワークなどと連携して取り組むことで他大学との繋がりを大切にする。また、SDGs 未来都市浜松を浜松市の大学全体で盛り上げ、地域貢献を目指した。
- ・Kids Open Campus、健康スポーツフェスでは地域の子供達や親子に手軽にできる運動を大学

と協力して実施し、子ども達の運動する場所を提供すると共に、親世代の運動不足を解消。

・まちなかスポーツフェスでは浜松市からスポーツを変えていけるように TOMO RUN 様と協力して多種多様なスポーツを浜松駅を通過してくれた人に伝え、地域のスポーツへの関心や意欲の向上を目的とする。

#### 〈工夫〉

・子ども達に運動することの楽しさやスポーツの魅力をそのまま伝えるだけでは伝わることが少ないと考え、できるだけ活動を自分で体験してもらい難しさや楽しさを肌身を持って体験してもらうことで考え方や価値観が変わり、スポーツを見ること、すること、支えることに関して良いイメージを持ってもらえるようにした。

・大学生交流フェスタでは健幸カルタを利用して子どもに運動することだけではなく、SDGs に加え、健幸について考えるきっかけを作るようにした。

・大学生交流フェスタでは自分達のブースの運営をするだけでなく実際に大学生交流フェスタの運営に携わり、イベントの成功のために多くのことを考えることで、イベント全体で SDGs の活性化に結びつけるようにした。

・Kids Open Campus では昨年の走る、跳ぶ、投げるという項目に蹴るという動作を追加し昨年からの引き続き参加してくれている子どもたちにも新たな運動を提供できるようにした。

・健康スポーツフェスでは親子に視点を当て子どもと大人二人でできるような取り組みを行うと共に今回運動しただけではなく、これから家でも簡単に運動できるように工夫した。

・まちなかスポーツフェスでは、専用機器を用いたアジリティトレーニングを機器の体験を提供した。目新しさもあり、子どもや大人まで興味を持ってもらえた。また、当日のランキングを設けることでゲーム性を高めたり、向上心呼び起こすように工夫した。



### 3. 事業成果

#### ① Kids Open Campus

2 部制（1 部 1 時間）で行い、約 100 名の子どもが参加した。

#### ② 大学生交流フェスタ

2 日間の実施で、両日 100 名以上の親子がブースに来場した。

### ③ 健康スポーツフェス

2部制(1部1時間)で行い、約40名の親子が参加した。

### ④ まちなかスポーツフェス

約5時間のイベント中に、100名以上の子どもや大人がアジリティブースを訪れ、体験した。多くの運動機会の適用ができたが、それ以外にも、様々な大学や、地域やスポーツ団体、会社と協働で地域を盛り上げ、人々の健康づくりの支援ができたことが貴重な経験となった。また、今回、代表の栗野がイベントの企画、運営にも深くかかわり、準備の重要性や運営時の臨機応変な対応等、様々な学びを得た。

## 4. 今後の展望

子ども達への活動は街が活性化し、賑わいをもたらす一つの方法だと思いため今後も継続して取り組んでいきたいと思う。特に、イベントでの単発でのかかわりが多いため、家や公園などで手軽にできる運動などを広めていく予定である。そうすることで、子ども達に運動をするきっかけや運動の楽しさを知ってもらい、自ら運動したいという子ども達を増やしていけるよう促していきたい。

また、ぶれぐろラボ単体の活動だけではなく、より多くの大学、地域の団体と積極的に活動することで、より大きな地域貢献や街の賑わいを創出したい。



## ● 背景

子ども達の体力や運動能力低下問題の改善のために学内外のイベント参加や子ども達の健康増進につながる活動を小学校などで行ってきた。子ども達を取り巻く遊びや運動環境に大きな改善はないため引き続きこれまでの活動を発展的に実施したいと思った。

## ● 目的

子どもの親世代の運動不足も問題視されているため、今年度は特に、より多くの大人も一緒に楽しめる機会を増やすことも目的にし、体を動かすことや、子どもとの運動機会を持つことの楽しさを感じ、継続してもらうための機会を考え、実施していく。

## ● 内容

### ①kids open campus「とこはオリンピック2023」

日時:2023年 7月15日 (2部制)

場所:常葉大学真和体育館

内容:「走る」「跳ぶ」「投げる」「蹴る」の体験・測定、フォームの改善のためのアドバイス。

参加人数 約100名

### ②大学生交流フェスタ「身近なことからSDGsを考えよう」

日時:2023年 9月23,24日

場所:イオンモール浜松志都呂

内容:「健幸かるた」を使ってウェルネスを知ってもらい、楽しく運動体験をしてもらう。

参加人数 両日100名以上

### ③まちなかスポーツフェスティバル

日時:2023年 11月3日

場所:浜松駅 ソラモ

内容:浜松駅前の人が多い場所でスポーツの普及や浜松市の活性化につながる企画をする。

参加人数 1200名以上

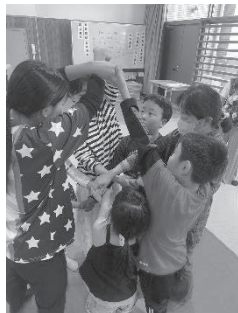
### ④健康スポーツフェス

日時:2023年 11月4日

場所:常葉大学 8号館柔道場

内容:親子を対象とした運動教室を行い、家で一緒に楽しくできる運動を紹介する。

参加人数 約40名以上



## ● 結果

本プロジェクトを通じて今まで行なってきた活動にプラスした取り組みを行い、子ども達の運動する機会を提供し、運動する場所を作ることで子ども達の運動意欲の向上につながった。

ゴールデンエイジである子どもの運動動作を習得しやすい時期に1つの運動だけを教えるのではなく、多種多様なスポーツを幅広く教えることで将来スポーツをやりたいと思ってくれる子どもが増えればと思う。

子どもと親と一緒に室内でできる運動を提供することで子どもだけでなく大人も運動することに関する意識を変えることができた。また、年齢に合わせて運動強度を設定するなど個別性を大切に、運動能力の差にも向き合うことができた。

## ● 今後の展望

子ども達への活動はいつも笑顔が飛び交っており街に賑わいを創出する1つの方法であると思うため今後もこのような活動を継続的に行い、地域貢献ができればと思った。また、次に同じイベントを行うときは更にグレードアップし、より楽しんでもらえるような活動を行なっていきたい。

謝辞 とこは未来塾によるプロジェクトへのご支援にこの場をお借りして心より御礼申し上げます。

## 小学校体育支援ボランティア

所属：SMILE SUPPORTER

岡田羽菜（代表） 海野千尋 名倉芽依 袴田歩夢 袴田更紗  
深澤凜 堀内瑛人 石川侑弥 金大海 上杉修平

### 1. 目的・概要

子どもの体力・運動能力の低下は長年問題視されており、2022年度の全国体カテストの結果からも深刻化していることが分かる。また、様々な理由から公園などで思うように遊ぶことが出来ない、また家庭の経済格差が子どもの習い事の差に影響を与えている現代において、子どもたち全員が受ける体育の授業はとても貴重な時間と言える。教員1人での体力、運動能力差のある集団の指導は困難であり、マット運動や跳び箱の補助で、男性教員が女子児童に触れてサポートすることができないなど、体育授業の運営での苦労があることを知った。私たちはこれまでにスポーツや運動を楽しみその恩恵を受け、保健体育の教員になることを目指して学んでいる。小学校体育の質の向上を目指し、安全確保、授業補助・サポートを行うことは、児童にも小学校教諭にも、私たち自身にも有意義な活動であると考え有志を募り、この活動を実施した。

### 2. 事業内容

#### ① 水泳の授業の補助

1年生から6年生の各クラスで、主に安全管理と水泳が苦手な児童へのサポートなど、担当教員の指示の下に補助を行った。

低学年では、まだ顔を水につけることが苦手な児童も多く、そのため、数人のグループを作り、まずは手で水をかけ水に慣れるところからスタートした。顔をつけられる児童は顔を水につけたまま伸びや、バタ足の練習などを行い、その際には手が伸びていない児童やバタ足の足をうまく使えていない児童に対して指導を行った。興奮していて落ち着きのない児童に対して注意を促すなど、安全管理には十分に注意した。

高学年では、ほとんどの児童が顔を水につけ泳ぐことができていた。5年生は30分間完泳を控えていたため平泳ぎの指導が主だった。息継ぎのタイミングや、足と手のタイミングなどを実際に大学生が泳いで児童に見本を見せた。プールサイドの縁を掴んで足と息継ぎのタイミングなどを確認するなど、30分間完泳するための練習指導を行った。プール後の体をしっかり拭くことができているか等の体調管理につながる行動もよく観察した。男性教員による児童の体を触れての指導を控えるため、女子学生が女子児童の補助に積極的に当たった。

〈工夫した点〉

水が怖いという児童に対して、まずはシャワーから慣れさせるような工夫を行った。水泳



を習っている子といない子とで差があるため、難易度調整を意識する必要があった。例えば、水に顔がつけられない子のサポートでは顔を一瞬つけるのが限界で鼻に水が入るのを怖がっていたため、まずは鼻に水が入らないようにするためにはどうしたらいいか伝え、声をかけながら補助を行った。力を抜くことや、一定のリズムでボビングをすることを伝えた。結果、その子は初めて25メートル口で呼吸を続けながらバタ足ができた。また、少しの成長にも気づけるように努め、褒めることを意識した。その上で、全員に同じことをさせるのではなく、一人ひとりをしっかり見て段階に合わせた指導を行い、新たな成長が望めるような課題を提示できるようにした。そして、児童同士の助け合いや教え合いで友達と一緒に頑張るというモチベーションや雰囲気づくりに努めた。



## ② 跳び箱の授業の補助

先生の補助を中心に4年生から6年生のクラスに入り、跳び箱が苦手な児童から、発展技を行う児童まで分かれて指導と安全管理の補助を行った。

発展技のデモンストレーションを見せて行ったり、跳べるような補助やけがをしないような補助を行ったりした。跳び箱が怖い子とそうでない子の差が顕著に現れていたため、児童一人ひとりの段階にあった指導が必要とされていた。発展技にチャレンジしたいという児童に対してはけがには十分に注意した上で首跳ね飛び等を指導した。台上前転に挑戦している児童に対しては跳び箱の段数を変える等の工夫を行いながら指導した。開脚跳びに挑戦している児童に対しては手のつく位置やロイター板の使い方の指導を行った。かかえ込み跳びでも手のつく位置や体の使い方についての指導を行った。

〈工夫した点〉

跳び箱が怖いという児童に対してのアプローチについて特に工夫した。跳ぶ毎に声かけを行い、少しずつ出来ることを増やしていけるように指導した。跳び箱は特にけがの危険性が高いため、けが防止のための補助や段階を踏んでの指導を怠らないように努めた。跳び箱は児童の技能レベルや恐怖心等から挑戦できる技も異なるため、児童の声を聞きながら、様子も観察しつつ、技のレベルを上げていく補助を行うことを意識した。



### 3. 事業成果

今回、水泳の授業の補助に、延べ18時間、8名の学生が参加した。(葵が丘小学校12時間/7名、河輪小学校 6時間/4名) また、跳び箱の授業の補助には、(河輪小学校 4時間/8名) が参加した。いずれの活動においても、小学校体育の質の向上、安全確保に貢献でき、有意義な活動にすることが出来た。

### 4. 考察

この活動を通して、小学校教諭の知識や指導の幅広さを実感し難しさを感じた。教職を目指す私たち大学生にとっては、現場でしか得られない現状を知ることができ、有益な時間であった。児童に自分の持つ知識や技術を正確に教える事の困難さと共に、児童たちの学ぶ姿勢と笑顔でより教員を目指したいという意識が高まった。また、小学校教諭たちからも、安全管理の面で児童を見守る目が多くて助かったという声も頂いた。同時に、安全管理をするためには、教員の正しい知識が求められることがわかった。

水泳支援では、近くに担当教員以外に大学生がいることで安心感を与えられ、水に慣れて頑張ろうと成長する姿を見ることが出来た。スケジュールの都合で、連日異なる大学生が支援に行くことになったが、終了後すぐに指導教員と学生間で報告事項を共有したことにより、円滑に進めることができた。

跳び箱支援では、1台の跳び箱に1人ずつ大学生が補助に当たれたことにより、安全性を向上させた。事前に、稲垣友裕先生より補助や発展技の事前指導を受け準備をしていたため、大学生もより自信を持って指導に当たれ、危険な跳び方をしている児童には声掛けし、障害を防いだ。苦手意識を持つ子には、難易度の低い練習から行い自信を損なわないように支援ができた。

### 5. 今後の展望

小学校体育の授業の質の向上、私たち学生の学びの充実のために引き続きこの活動を行っていききたい。まず、今回は「水泳」と「跳び箱」の報告を行ったが、「ボール投げ」「マット運動」の指導の要望もあり、今後実施する予定である。(その際に、作成しためんこを使用する)

今回は、指導教員とつながりのある特定の小学校を中心に活動を行い、小学校との連絡は指導教員が行ったため、今後はより学生が中心となり、他の支援を必要とする学校も訪問できるようにしていきたい。また、小学校側は大学生が活動しやすいように、体育の時間を調整してくれるなどの対応を取ってくれたが、それでも大学の授業との重複で興味や関心のある学生が参加できず、スケジュールが合う学生に負担がかかった。より多くの学生が参加して、より多くの支援が必要な学校に行ける体制を築けることが望ましい。

## ●目的・概要

- ・全国体カテストの結果(2022)から、子どもの体力・運動能力の低下が深刻化している。
- ・習い事ではなく、誰もが受ける小学校の体育の時間は貴重であるが、教員1人での集団指導は困難であり、体育授業の運営での苦労がある。
- ・SMILE SUPPORTERのメンバーたちは、これまでにスポーツや運動を楽しみ、その恩恵を受け保健体育の教員になることを目指して学んでいる。

➔ 教員を目指す学生として、小学校体育の質の向上に貢献したい！

## ●事業内容・方法

### ①水泳補助 【場所】河輪小学校、葵が丘小学校【期間】6月下旬～7月上旬

【主な支援】 安全管理と水泳が苦手な児童へのサポート

- ・低学年→水慣れ
- ・5年生→平泳ぎの指導を中心に30分間完泳の準備
- ・全学年→適宜、泳ぎの見本を見せたり、全体の観察などの安全管理
- ・プール後の体をしっかり拭くことができているか等の指導の体調管理など

### ②跳び箱補助 【場所】河輪小学校 【期間】12月上旬

【主な支援】 発展技を行う児童から跳び箱を苦手とする児童へのサポート

- ・補助(跳べるように、けがをしないように)
- ・発展技のデモンストレーション
- ・得意不得意の差が顕著に現れていたため、児童一人ひとりの段階にあった声掛け
- ・片付けの指導など



## ●事業成果

【水泳の授業補助】 18時間8名の学生 【跳び箱の授業補助】 4時間8名の学生  
いずれの活動においても、小学校体育の質の向上、安全確保に貢献でき、有意義な活動にすることが出来た。

## ●考察

小学校教諭の知識や指導の幅広さを実感し難しさを感じた。教職を目指す私たち大学生にとっては、現場でしか得られない現状を知ることができ、有益な時間であった。児童に自分の持つ知識や技術を正確に教える事の困難さと共に、児童たちの学ぶ姿勢と笑顔により教員を目指したいという意識が高まった。

## ●今後の展開

小学校体育の授業の質の向上、私たち学生の学びの充実のために引き続きこの活動を行っていきたい。まず、今回は「水泳」と「跳び箱」の報告を行ったが、「ボール投げ」「マット運動」の指導の要望もあり、今後実施する予定である。(助成金で制作しためんこを使用する予定)

## 令和5年度ここは未来塾 ライトプラン 採択団体一覧

ライトプラン：本事業に挑戦しやすく、事業負担の少ないスタートアップを目的としたプロジェクトです。

NO	キャンパス	タイプ	テーマ	グループ名
1	静岡 瀬名	B	高天神城跡マイクラ化プロジェクト	マイクラブ
2	浜松	B	チャレンジ バレーボール	トコハスポーツサイエンスサークル
3	浜松	B	ボッチャを通した生涯スポーツによる地域活性化	障☆スポSC
4	浜松	B	果物廃棄の発生を抑制する試み	林原ゼミ

タイプA：開かれた大学づくりプロジェクト

タイプB：地域貢献・活性化プロジェクト

タイプC：現代的課題解決プロジェクト

**ライトプラン**

**4団体による報告**

**ポスター発表**

# 高天神城跡マイクラ化プロジェクト

## ～ゲームを通して観光振興 娯楽×教育の可能性～

常葉大学造形学部 マイクラブ  
青島合花 小林飛鳥 佐藤葵 須田健史 岩瀬夏穂 大岳涼音

### 目的・背景

本企画は静岡県掛川市に位置する山城跡地である高天神城跡の知名度向上及び、掛川市のPRが目的である。掛川市からのPR依頼をきっかけに、より発展させた企画としてプロジェクトを立ち上げた。高天神城跡は、戦国時代に徳川・武田の両雄が攻防戦を繰り広げた決戦場で、東海一の堅塁を誇った山城である。現在、城跡は国の文化財に指定され、平成29年には「続日本100城」にも認定されている。しかし、高天神城跡は歴史的価値が高い場所であるにもかかわらず、実際に足を運ぶ人が少なく、特に若年層の関心が低いことが課題である。そこで、高天神城跡をより多くの人に認知してもらうために、世代を問わず人気のゲームである「マイクラフト」を接点とし、掛川市の町おこしにつながる企画に取り組んだ。

### 活動内容

#### 現地調査

掛川市職員の方々と一緒に高天神城跡へ足を運び、現地の視察を行った。険しい山道を目の当たりにし、実際に現地に足を運ぶことの難しさを感じた。



#### ワールド制作

静岡県が公表している三次元点群データを活用し、大まかなワールド地形を制作。模型や資料とワールドを見比べながら、地形や建物の制作を進めた。



#### ゲームの考案

出来上がった高天神城ワールドで遊べるゲームを考案した。攻城戦やスタンプラリーを通して、高天神城の魅力を体感することができるよう試行錯誤を重ねた。



#### 掛川市長にお披露目

高天神城ワールドを制作する上で工夫した点を説明しながらワールドツアーを行った。また、市長vs学生で攻城戦を行い、掛川市長にワールドの魅力のアピールした。



#### 掛川市のイベントにブース出展

2023年10月29日に掛川百鬼夜行ハロウィンイベントが開催された。掛川市のブースの一角で高天神城ワールドを披露し、多くの子どもたちに遊んでもらうことができた。



#### 子ども向けイベント開催

2023年12月24日にコラボレーションスペースTaktでイベントを開催し、子ども達に高天神ワールドの中で遊んでもらった。イベントでは高天神城について学べるツアーや、フォトスタンプラリー、チームで戦う攻城戦を行った。

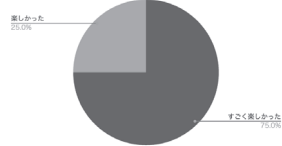


### 結果

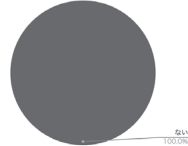
子ども向けイベントに参加した子ども4名に対してアンケートを行った。アンケートの結果から、最初は参加者全員が高天神城に行ったことがなかったが、イベント参加後には高天神城に行ってみようという気持ちを持ってくれたことがわかる。高天神城と接点がなかった子どもたちに、マイクラフトを通して接点を作ることができた。また、掛川市のイベントでも、子どもたちからたくさんの明るい感想をもらうことができた。これらの活動を通して、教育×マイクラフトの親和性、可能性を強く感じた。



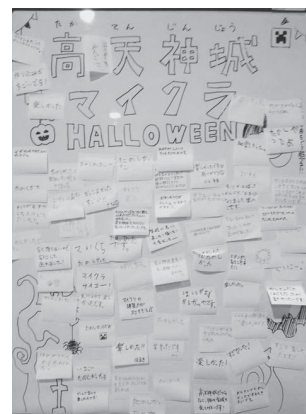
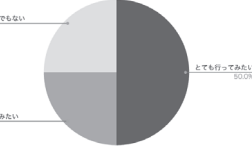
Q3.このイベントは楽しかったですか？



Q5.高天神城に行ったことはありますか？



Q6.高天神城に行ってみようと思いましたか？



### まとめ・今後について

今回のプロジェクトを通して掛川市のPRや、大人から子どもまでさまざまな人たちに高天神城の歴史的価値を認知してもらうきっかけを作ることができた。今後も掛川市との連携で「マイクラ高天神城」をPR材料としたさまざまな教育普及活動・観光振興の展開が望める。

## ①「問題と背景」

ここは未来塾のプロジェクトとして「チャレンジ バレーボール」を企画し、「バレーボールを通じて浜松市を元気にする」ことを目指し、スポーツ指導者を目指す学生やスポーツ科学を学ぶ学生が、浜松市の小学生とその保護者を対象にバレーボールの体験講座を実施することにより、浜松市の活性化を目指す活動を行うことを研究の目的とした。

## ②「方法」

体育館に6人制バレーボール、ソフトバレーボール、シットイングバレーボールのコートをそれぞれ設営して行った。1回目の富塚協働センターでは対象者を3つのグループに分けてそれぞれの種目をローテーションで行った。各種目に大学生講師が数名付き時間ごとに対象者を入れ替えるという形をとった。2, 3回目の伊佐見協働センターと篠原協働センターではグループ分けを行わず初めにソフトバレーボール、次に6人制バレーボール、最後にシットイングバレーボールを全員で行う形に切り替えて実施した。この時大学生講師が各種目ごとに主担当を中心として指導を行った。さらに、対象者の意思や技術レベルによって、同じ種目を継続して行うこともよしとした。特にシットイングバレーボールはその競技形態が確立された経緯などの説明などを行い様々なバレーに触れてもらうように努めた。

## ③「結果」

アンケートは以下の通りである。

(体験者の声)

- ・「年齢に関係なく楽しめるようにしてくれており、一人一人がボールに触れるように工夫されていた。」
- ・「シットイングバレーボールという初めての経験ができて楽しむことができた。」
- ・「シットイングバレーボールが面白かった。」

(学生講師の声)

- ・「小学生の子どもたちにわかりやすく説明して、なおかつみんなに楽しんでもらえるように工夫するのが難しかったが、「楽しい」と言ってくれたことがとてもうれしかった。」
- ・「自分も楽しめたし、何より子どもたちが楽しんでくれたことがうれしかった。子どもたちがバレーをする機会に携わることができて、とても貴重な経験ができた。」



## ④「考察」

講座では6人制、ソフト、ビーチ、シットイングなど普段はあまり経験することが少ないバレーボールを実施した。成人用に比べて小さくて柔らかく、軽い各種ボールを用意できたため参加者からは非常に好評であった。また、親子でスポーツができた点や子どもたちが飽きずに取り組める講座設定にも準備の効果が確認できた。しかし、学生講師などの都合上、募集人数や実施回数を多くできなかったことが反省点であった。この講座の継続により小学生などの運動実施機会が増加すると共に浜松市の地域活性化へ貢献することができると考える。

## ⑤「結論」

子どもたちを30人以上指導するため目の行き届かなくなってしまう子どもたちが出てしまうことが最大の課題だと感じた。そのため学生講師の人数を今後どんどん増やしていきたいと考えている。そして参加者全員に満足してもらえるようなイベントを目指す。



常葉大学  
TOKOHA UNIV.

# ボッチャを通じた生涯スポーツによる地域活性化

障☆スポSC

保健医療学部 理学療法学科 地久剛士（代表）、前島亮輔、中村悠吾、竹平琴葉、佐藤未央、飛騨彩未、柴田結夕、荻原優杏、渡邊なつみ

## ① 「はじめに」

「人生100年時代」と言われており、老若男女、また、障がいの有無に関係なく健康意識が高まっている。しかし、地域でのスポーツ・レクリエーション参加はまだまだ少ない。ボッチャはパラスポーツ競技であるが、障がいの有無にかかわらず誰でも楽しめる競技である。そこで、ボッチャを通して、スポーツをする機会を設けることで、地域活性および健康増進につなげることを目的とする。

## ② 「取組内容」

生涯スポーツとして、誰もが楽しめるパラリンピック競技のボッチャを活用する。地域における、障がい者施設、小学校、協働センターなどで、障がいの有無・年齢などに関係なく様々な地域住民の方を対象にボッチャ体験会を開催する。また、地域でのイベントにも参画する。

- ・ルール説明パンフ、アンケート作成
- ・体験会開催（ボッチャの技術など実演、実際に体験・試合）

## ③ 「実際の活動」

浜松ボッチャ大会、キッズオープンキャンパス、大学生による講座、キトルス祭、遠江学園パラスポーツ大会など



キトルス祭



協働センターでのボッチャ講座

## ④ 「まとめ」

誰もが楽しめるパラリンピック競技のボッチャを活用して、地域でのイベントを開催した。普段あまりスポーツをしない方も参加し、体を動かすことで健康増進につながることを期待できた。また、知り合いに紹介したい、続けていきたいというアンケート結果からも、交流の輪が広がり地域活性につながると考えられる。





# 果物廃棄の発生を抑制する試み

林原ゼミ

太田芽衣 筒井虹汰 夏目愛実 堀内陽菜 山下紗輝 山梨哲弥

## 目的・背景

世の中は廃棄物の発生抑制の機運が高まっている。「はままつフルーツパーク時之栖」では、**収穫体験終了後の果物は廃棄処分となっている**。そこで我々は工夫すれば商品として売り出せないかと考えた。廃棄処分予定のいちご・梅を使用し商品化を目指し、製品の作製に取り組む。

## 方法

廃棄予定のいちご、梅（梅酒作製に使用したもの）を使ったいくつかの試作品を製作し、生産販売側の視点および消費者側にアンケートを行い最適な試作品を決定する。その後、その商品に合うパッケージデザインおよび販売価格を時之栖（協賛企業）と検討する。

- ① 廃棄処分予定のいちごを収穫し/梅を譲り受け、冷凍保存する。
- ② いちご/梅を使った商品化を考え試作する。
- ③ 生産販売者（「時之栖」の職員）に対し試食会を行い、販売可能性を探る。
- ④ 「時之栖」で得られた意見を基に試作を重ねる。
- ⑤ イベント（「産業振興フェア in いわた」）参加者に対して試作品を配布し、試食による消費者側の好みを探る。

## 活動・結果

### 【生産販売者（時之栖職員）への試食会】

評価項目	平均	評価
いちご		
甘味	2.8	普通
テクスチャー（食感）	2.7	普通
ム		
見た目	2.7	普通
香り	2.5	やや良い
ス		
総合評価	2.8	普通
いちご		
甘味	2.4	やや良い
酸味	2.3	やや良い
ご		
見た目	1.7	やや良い
香り	2.1	やや良い
A		
総合評価	2.7	普通
いちご		
甘味	3.6	やや悪い
酸味	1.7	やや良い
ご		
見た目	1.6	やや良い
香り	2.7	普通
B		
総合評価	3.3	普通

#### 〈いちごムース〉※表①

「普通」の評価が多かった。

「香料不使用のラベルを貼りアピールする」「いちごの香りが飛んでいる」という意見があった。

#### 〈いちご酢〉※表①

全体的に「やや良い」の評価が多かった。A、Bの総合評価を比較すると、Aの方が高い評価を得られた。「酸味が強く、薄めてもいちごより酸味がきつく感じた」「商品として一般消費者にリサーチしてみたら良いと思う」という意見があった。

このアンケート結果から、いちごムースはいちご酢に比べ評価が低く、日持ちしないうえ、生産性も低いことからいちご酢のみ試作を重ね商品化を目指した。

#### 〈梅ジャム〉※表②

食品廃棄物を利用した商品としての価値の評価は高かったが、アルコール感や酸味についての評価は低かった。「梅の風味が弱い」「梅の味が甘みに負けている」という意見が大半を占めた。

#### 〈梅ジャム入りパウンドケーキ〉※表②

見た目の評価は「普通」または「良い」の評価が大半を占めた。

「梅の果肉をもっと入れたらいいと思う」「普通のパウンドケーキと変わらない」という意見があった。

このアンケート結果から、「梅の味を強くする」ことを以降の目標とし、試作を行っていくこととした。

#### ※表①

	評価項目	平均	評価
梅ジャム	甘味	2.3	やや良い
	酸味	1.0	良い
	テクスチャー（食感）	2.4	やや良い
	見た目	3.4	普通
	香り	2.1	やや良い
	アルコール感	1.0	良い
	食品廃棄物を利用した製品としての製品価値	3.8	ややある
パウンドケーキ	総合評価	3.2	普通
	味	2.6	普通
	テクスチャー（食感）	2.7	普通
	見た目	2.4	やや良い
いちご酢	香り	2.7	普通
	総合評価	2.8	普通

#### ※表②

	評価項目	平均	評価
いちご酢	甘味	2.9	丁度良い
	酸味	3.3	丁度良い
	見た目	3.2	普通
	香り	3.0	丁度良い
	総合評価	2.1	やや良い

#### ※表③

	評価項目	平均	評価
梅ジャム	甘味	2.8	丁度良い
	酸味	2.4	ややある
	見た目	3.1	普通
	香り	3.4	丁度良い
	アルコール感	2.2	やや弱い
	食品廃棄物を利用した製品としての製品価値	4.3	ややある
	食品廃棄物を利用していると気づくか	2.8	気づかない
	売れる・購入したいと思うか	1.7	買う

#### ※表④

### 【イベント（大学祭、産業振興フェアinいわた）での試食】

#### 〈いちご酢〉※表③

全ての項目で、「普通」または「良い」に近い評価を多く得ることができた。

自由記述には、「酸っぱすぎず飲みやすいがもう少し酸味があってもいい」「いちごの存在感をもう少し強く出すといい」「お酒を割るリキュールの的な活用もあると思う」という意見があった。これらのことから、総合的に良い評価を得られたためこの配合と割合に決定した。

#### 〈梅ジャム〉※表④

酸味・香りの評価が低かった。しかし、食品廃棄物を利用した商品価値についての項目は試食会時に比べ評価が高かった。自由記述には、「果肉感が欲しい」「香りが飛んでしまっている」という意見があった。

## 考察・今後の展望

いちご酢は、昨年度から今年度までの活動を通して、**クオリティを高めることができ、商品化に近づいたと考える**。次年度以降は、パッケージや販売方法等について検討を重ね、商品販売を考える。

梅ジャムは、時之栖の関係者の試食会やイベントでのアンケート結果から梅の風味に着目して試作を重ねた。この活動を通して、**梅酒に使用した廃棄予定の梅の利用方法のベースを作ることができた**と考えた。次年度以降は、アンケートの意見を参考に梅ジャムの商品のクオリティを上げ、商品販売を考える。



■静岡草薙キャンパス

〒422-8581 静岡市駿河区弥生町 6-1

TEL. 054-297-6100(代表)

教育学部／外国語学部／経営学部／

社会環境学部／保育学部

短期大学部 日本語日本文学科／保育科

大学院 初等教育高度実践研究科

国際言語文化研究科／環境防災研究科

■静岡水落キャンパス

〒420-0831 静岡市葵区水落町 1-30

TEL. 054-297-3200(代表)

法学部／健康科学部

■静岡瀬名キャンパス

〒420-0911 静岡市葵区瀬名 1-22-1

TEL. 054-263-1125(代表)

造形学部

短期大学部 音楽科

■浜松キャンパス

〒431-2102 浜松市浜名区都田町 1230

TEL. 053-428-3511(代表)

経営学部／健康プロデュース学部／

保健医療学部

大学院 健康科学研究科



常葉大学  
TOKOHA UNIV.

発行：常葉大学 地域貢献センター

発行日：令和6年3月7日

URL <https://www.tokoha-u.ac.jp>